

---

# 脇役

柑橘レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

脇役

### 【Zコード】

Z6397W

### 【作者名】

柑橘ルイ

### 【あらすじ】

文武両道、眉目秀麗、品行方正、だけどむつり助平が欠点な親友の日之下勇が勇者として召喚され、影が薄い、存在感がない、そんなんハ頭、晶は召喚に巻き込まれる。

異世界の神官のマリアと騎士コナ、そして魔術師メイをつれて魔王退治にでる勇と共に旅に出るのであった。

この作品は「Arcadia」様へも投稿しております。

辛口甘口など色々な感想をくれると嬉しいです、指摘など皆様の感想を参考に試行錯誤して書いております、よろしくお願ひします。



## 脇役一

校舎が赤く染まる夕暮れ時の校庭を、詰襟の学生服を着た男子高校生が歩いていた。

黒い髪に眼鏡の奥にある瞳は細く黒い普通の男子であつたが、不可思議なことに周囲に居る学生達から存在されないが如く見向きもされない。

「さてと、今日は帰つて何作ろうつか」

のんびりと歩きながらハ<sup>ハサウエイ</sup>頭<sup>あさり</sup> 晶<sup>あさひ</sup>は首を傾げ、夕食に何を作るか思考をめぐらす。

両親が共働きのため帰りが遅く、必然的に家事を一人つ子の晶<sup>あさひ</sup>がやることが多くなるのである。

「晶<sup>あさひ</sup>、久々に一緒に返ろうぜー！」

晶<sup>あさひ</sup>が振り返るとそこには親友がいた。

笑顔は凜々しくそしてかつこよぐ、ウエーブがかつた赤い髪に青い瞳の整つた顔立ちである。

晶<sup>あさひ</sup>と同じ詰襟学生服だがそれでも王子<sup>おうじ</sup>といつ雰囲気が抜けていい。

「勇か……確かにフェンシングの世界大会優勝を祝うとか言ってなか

つたか？」

「彼女達が暫くしてから帰<sup>サ</sup>しろだとよ」

なぜここにいるかと首を傾げる晶の言葉からそのときの状況が脳裏に浮かんだのか、日之下<sup>ひのした</sup> 勇は楽しげに目を細めていた。

そのとき隣のグラウンドから砂埃を巻き上げながら強風が吹き抜ける。

反射的に晶は顔を背け、砂が目に入らないよう目を閉じたが、次の瞬間にほしみじみとした勇の声を聞いて晶は呆れてため息をつく。

「白、シマシマ、黒にクマか……パンスト越しもなかなか……」

隣に居る勇を見ると口元を覆っているが、その手の中ではニヤニヤしているのだろう。

「勇が下着をみているのを女子が知つたら幻滅するだらうな、いくら顔が良くてもさすがに嫌がられるぞ」

「だから分からぬようにしていろわ」

眉間に押<sup>お</sup>えて首を振る晶に対し勇は肩をすくめるだけであった。

文武両道、眉田秀麗、品行方正、もはや完璧といわれる勇であつたが、やはり誰にも欠点がある、風が吹いたら下着を見るようなむつり助平なのだ。

それを知っているのは晶だけであったが、昔勇にいじめを止めて  
もらつた恩義を感じている晶は言つふらすつもつは無かつた。

「相手に不快な思いをさせない為に、ばれない様にしたんだっけ？」

「晶と話をしている時も、他のものを見ている時も視線でだけで捉  
える、俺以外は出来まい」

余程自信があるのか自慢げに話す勇だが、無駄なことに心身  
を注ぐその情けない姿に、晶はなんとかならないものかと脱力する  
と共にため息をついていた。

「なんとこゝ能力の無駄使い」

「それはこゝちが言いたい！」

晶を見る勇の瞳が光つたのは、夕田の所為ではないだろう。

「近づいても気付かれないなんて、ひりやましこぞこの野郎ー」

「まあ、自然に体がやるからな」

勇は握りこぶしを作るが、晶は癡だと苦笑いを浮かべる。

「お爺さんの影響だっけ？」

「そうだ、爺さんから色々教えてもらつたな」

北海道で未だ現役のマタギをやつている渋く寡黙な祖父の姿が晶

の脳裏浮かぶ。

孫を可愛く思うのか晶の祖父はサバイバル技術に狩猟の仕方、果ては動物の解体方法も教えこんでいた、普段寡黙な祖父であつたが狩を教える時は饒舌になり蓄えた口ひげを揺らし、楽しげに笑っていたのを晶は思い出していた。

狩猟の技術の中には獲物に気付かれない方法があつたが、上手く出来ない晶は家族や友人、果ては近所の人相手に日常的に練習していたのだが、それがいつのまにか癖になってしまい影が薄くなつたのである。

「あとは自然の神秘だな、それにまつわる伝説や神話、妖精や超常現象を想像したからな、おかげでファンタジー物を読み漁ることになつたな」

「本やネットを読み漁るインドア派かと思いきや、サバイバルも出来るアウトドア派、どっちだよつてツッコミたくなる」

山々に掛かる一本の虹の感動とそれに伴う話を祖父から聞いたときの面白さは凄かつたと、しみじみとする晶をよそに闇達に笑う勇であつた。

「勇ぐーん、バイバーイ」

女生徒達が勇に向かって笑顔を向けて手を振つていく。

下校時刻ゆえに帰宅する学生は多く、晶達を通り過ぎていく女生徒は皆挨拶していた、それに答えるように勇は律儀に全員に笑顔と共に手を振り返し、女生徒達は良い物を見られたとばかりに黄色い声を上げる。

それを見ていた周囲の男子生徒はケツと言わんばかりに「イラついていた。

「相変わらずもてるな、幼馴染達も大変だろ?」……

「なに言つているんだ、皆ロシア人のハーフが珍しいだけだつて」

そんな訳無いだろ?とジト目になる晶であつたが、肩をすくめる勇は本気でそう思つてているのが晶には分かつていた。

それよつもと勇が顎に手を当てながら口を開く。

「俺は晶の良さが周りに知られていないのが、不思議だと思つが……」

「それはそうだらうな、存在感無いし」

むしろそれが良いと内心思つてゐる晶は、あつけらかんと言い放つていた。

「そりゃ? いまどき高校生で家事全般をほほ元壁にこなせている、そんな奴最近いないぞ! 僕なら絶対田を付けるさ!」

「一人暮らしに近い生活をしていたら、じく普通に出来るようにな

るけどな……」

熱弁する勇の姿から薔薇の雰囲気を感じ取った晶は身の危険を感じ、顔を引きつらせながらゆっくりと離れていく。

「なんで離れていくんだよ」

笑いながら勇が肩を組んだ瞬間、晶達の周囲が真っ暗に染まった。日が残っている山の頂から発せられた黒い光が、一人を照らした結果であった。一瞬の出来事であったが、そこには晶達が居た形跡は何一つ残っていなかつた。

「は？」

突然視界が暗闇に閉ざされ、何が起きたか理解できない晶は呆然とするしかなかつた。

「勇？」

晶は肩に掛かっていた勇の感触が消えたことにより、より不安が募つた晶はまだ近くにいるかと声をかけるが返答が無かつた。

何も見えない状況に晶は焦りが増し、その場にしゃがみ込む。

「落ち着け、落ち着け……どうする？ どうしたい？ なにをする

べきだ？」

不安から震える身体を抱きしめ晶は自分に言い聞かせていた。

暗い山を過ぎ、す獵師として祖父から教えられた事の一つであり、すこしでも冷静になるための行動だった。

「とにかく情報……なにか光、明かりがあれば……そつだ！」

未だ不安と暗闇から身体の震えは収まっていないが、ポケットの中を震える手でまさぐり携帯を取り出す、視界を確保しようとカメラのライトを利用したのだ。

携帯が機能し画面の光で大分落ち着いた晶は電波を確認する、しかし残念なことに圏外であった。

繋がらないかと晶は落胆するが気を持ち直し顔を上げてカメラ機能のライトで周囲を照らした。

壁と天井は四角い石で作られ正方形の飾り気の無い部屋であった。

化粧台や服がかかつていてから更衣室関係、そして部屋の雰囲気と服の装飾から何処と無く中世ヨーロッパのようであり、あまりの周辺の変化に晶は口をあけ呆然とするしかなかった。

「や……会……し……！」

いまだに現状が理解できず周囲を見回す晶だったが、籠つた声が聞こえた瞬間に余計な音を立てないよう身体を硬直させる。

静寂に包まれる中でかすかに聞こえる音の方へ晶は光を向けると扉があり、晶は扉の向こうの状態を少しでも得ようと耳を押し付ける。

「勇者様！ お会いしたかつたです！」

「女性？」

扉越しの籠つた高めの声が聞こえ、女の声と晶は予想を立てていた。

「ちよ、ちよっと待てよ、勇者…？ いきなりなんだよ…？」

（勇…？ いるのか…？）

晶のよく知つた親友の声が聞こえてきたため晶は飛び出でようと扉を開き覗き込む。

しかし扉の向こう側の様子と、自身に起きたことがどうなつているかよく分からぬ状況のため、危険が無いかと思ふとぞまつ少し扉を開き覗き込む。

晶の居た部屋と同じ石で作られた部屋には多数の蠟燭に照らされており、そこにはおよそ二十歳前後の美女が部屋の中央で勇と向かって、その口を羽織つておりその姿は聖職者を思わせた。

美女は白地に所々青いラインが入つた、全体にゆつたりとしたローブの様なものを羽織つておりその姿は聖職者を思わせた。

腰まで届きそうな金髪は緩やかに波うつり、瞳は黄色、両尻が下が

つていて優しげな雰囲気を感じさせる女性は、両手で勇の手を握り詰め寄り瞳は涙が零れている。

(二人だけか?)

晶は慎重に顔だけ出して周囲を見回すと勇と美女しかいないと判断できた。

危険がとりあえず無いと晶は一息つき、念のため用心の為に音を立てずゆっくりした動作で中に入る。

手を握り締められ、困惑する勇は晶と視線が合い勇は驚いていたが、よく分からぬ状況でも美女の涙には弱いのだろう、勇は懸命に慰めているのは流石であった。

「申し訳ございません……わたしの名前はマリア・セイ・フォトン、神官をしてこます」

落ち着いてきたマリアは勇に頭を下げる。

涙声であったが次の瞬間には気を取り直したのか毅然としていた。

「此処はアズガルド大陸にある王都トキ、今現在魔王が現れ襲われています。魔王を倒せるのは勇者様のみ、それ故に勇者様を御呼びいたしました」

勇を見つけ大分冷静になつた晶は、説明の中に勇者や魔王といった気になる単語が含まれており、その単語から顎に手を当て予想を立てる。

「なるほど、ゲームやファンタジー小説のよつな勇者召喚物といつた感じか？」

「誰です！？」

振り替えたマリアと晶の視線が絡んだ瞬間に、晶の背中に冷や汗が流れ仰け反っていた。

美女が向けた瞳は嫌悪や憤怒といった負の感情に染まついていた。

「こいつは八頭晶、俺の親友だ」

勇へと顔を向けるマリアから視線が外されるとともに、晶は体が弛緩し酷く緊張していたこと自覚する。

「なんだあの田は……」

吹き出た冷や汗を拭いながら小さく呻く晶であった。

「勇者様の親友、ですか？」

マリアの値踏みするよつな視線を晶にむけると、緊張した様子で晶は仰け反っていた。

「勇者じゃないけど……そりだ

わけも分からず、勇者といつ正直面倒くさそうな役柄に、勝手に決め付けられるのは困る勇は断つてから頷いていた。

「一人しか召喚されないはずですが……」

晶にはさほど興味が無いのか、マリアはすぐさま勇へ向き直る。

「どうこうことだ？」

現状で一人いることに首を傾げるアリアに疑問に思つた勇が尋ねた。

同じく晶も不思議に思つているのだろう黙つて聞いていた。

「はい、昔から一定周期で魔王が出現するのですが、それに合わせて勇者様を召喚するのです。過去に四回召喚され、全て一人であります」とされていきます

前にいた時の状況を思い出した勇は、あることが閃き手を叩く。

「もしかしたら一人だけ召喚されるはずだっただけど、偶然晶と肩を組んだ瞬間に発動したのか！？」

「なるほど、つまりオレは巻き込まれる形で召喚された、とこう」とか？

なつとくした様子で晶も頷く、しかし勇には聞き捨てなら無い言葉も含まれていた。

「ちよつと待て！俺が勇者として召喚されたとは決まって無いだろ！？ 晶かも知れないじゃないか！」

勇者と決め付けられて困る勇は反論するが、チツチツ指を振る晶にはちよつとした根拠があようだつた。

「そいつはどうかな？ 容姿的にも能力的にも、どう考へても勇しかりえん！」

「容姿も能力も関係ないだろ！」

勇は睨みながら否定するが晶いわく、勇者召喚物はカツ「良く身体および頭の能力も高いことが多いものであり、そのことが晶には勇が相応しいとした理由であつた。

「そして何より！」

関係ないと口絵を開こうとした勇に被せるよつて晶は声をあらげ、さも意味ありげに言葉をためる。

勢いに押され勇は黙つてしまい、つられたのかマリアも固唾を呑んでいた。

「勇が美人の願いを聞き入れないわけが無い！」

勇を指差す晶の姿は神の啓示のようであつた。

「ぐー、それは……」

瞬間困り顔の勇とマリアが向き合つ、勇はなんだかんだ言いつつも女性の願いを断る出来ないのだった。

勇は言葉に詰まり頭をフル回転させる、勇者といつ重みか美女の願いか、両天秤にかけ葛藤する。

「あの、勇者様は貴方です」

かしこまりながらマリアが勇の額を指差していた。

「な、なんだ?」

「刺青があるな」

勇は一人に注目され、自分の額に何かあると額を触つてみる、何も感触が無く眉を顰める勇だったが、見られない勇に晶が代わりに指摘する。

「それが勇者様である証です、今まで召喚された人物には皆額に証が現れていたそうです」

マリアは眩しいものを見るように目を細め、声はため息をつくような喋り方であった。

「い、いや、証があつても俺に勇者なんて大役が出来る器じやない!  
残念だけど……」

「そんな! お願いします! 貴方しかいないのです!」

マリアの願いに答えはしたいが勇者という道の事柄である、自信

が無い勇は断つたがマリアは尋常ではない必死で勇に詰めより頼  
願し始めた。

「御免……」

安請け合いするわけにもいかないと勇は断つた。

「まあ……それが勇の判断なら仕方ないな」

勇の答えに若干驚きの様子の晶だったが、どこか納得もしている  
ようだった。

「何でもしますからー。この世界をー。私を捨てないでくださいー。」

悲しげなマリアの視線から逃げるよつて、勇は苦渋に満ちた顔を  
しながら背む。

「そう……ですか……」

顔を下に向け、力ない声と脱力しながら手を下げるマリア、その  
姿を見た勇は申し訳ない気分で目を伏せる。

「つー」

晶の息を呑む声に顔を上げた勇に鳥肌が立つ、マリアから発せら  
れる雰囲気が陰鬱で真つ暗に染まっていたのだ。

「あ、アハ、アハハハハハハハハハハ」

突如顎を上げ、天井を見上げながらマリアが唐突に笑い出した。

異質な笑いの姿に気が触れたのかと晶と勇は恐れ戦き後ろへ下がる。

「アハハ、無くなりました、何もかも、全て…… 唯一の役割さえ出来ずに……ア、アハハ！」

「勇！ 頷いておけ！ 何かやばいぞ！」

気を取り直した晶が勇と同様に危険を感じたのか、肩を思い切り掴んで強引に目を合わせる。

「無理だつて！ セつきも言つたが 」

「だつたらこいつも言つてやる！ 容姿的にも能力的にも、どう考  
えても勇しかりえん！ やれ！」

晶にも床を擦る足音が聞こえたのか手を止め、二人は同時に音の方に視線を向ける。

そして視界に恐怖を煽るものが入り、勇と晶は壁際まで全力で一  
気に下がった。

そこにはマリアがいた、笑うのを止め脱力するように手を下げジ  
ツと晶達を見ており、その瞳には何も写しておらず生氣が全く無か  
つた。

「うわ……」

身体を震わせ晶は小さく呻いている、恐ろしさの余り意図せず出

た様子あつた。

それほどまでに暗い田である、田を逸らすと知らぬ間に殺される様子が脳裏に浮かび勇は視線が外せなかつた。

晶が急かすよつて片手で揺さぶるが、恐怖の余り反応が出来ずにいると、一步ずつゆづくつ近づき手を伸ばすマリアの姿があり、正に死神であつた。

「わかつた！ やるー！」

恐怖を吹き飛ばすよつて、勢いで出でてしまった勇の言葉が部屋全体に響き渡つた。

先ほどはやらないと言つていたが、マリアのあまりにも恐怖を煽る姿から逃れるために口走つてしまつたのだ。

その瞬間マリアが一人に手を伸ばした体勢でピタリと止まり、そして瞳に生気が戻つていくのを見た。

一人は盛大に安堵のため息を漏らすと共に脱力して座り込むのであつた。

「今までに無い恐怖だつたな

「ああ、そうだな

晶が片手を差し出し、生きているのを確かめるためと理解した勇も片手を出し、しつかりと握手を交わす、一人の様子はやり遂げた感が凄まじい熱い握手であつた。

「本当に勇者様になつてくれますか？」

一瞬肩を振るわせた晶は声の方を向く、そこには先ほどと打つて変わつて、元の優しげな雰囲気のマリアが恐る恐る勇へ尋ねていた。

「あ、ああ、勇者とやらをやるよ、何処まで出来るかわからぬいけどな」

フウとため息一つつく勇は決心したのが晶には分かつた。

本人はいまだ自信が無いようだが、美女の願いを無下には出来ず、どんな状況であれ、言つたことは覆すつもりは無いのが、晶にも分かつていた。

「本当にですか！ ありがとうございます」

答えを聞いたマリアは余程嬉しいのだろう、目頭に涙を溜めて勇の手を握り締めていた。

「そういえば名乗つてなかつたな、俺の名前は口之下勇だ、勇でいい、これから宜しく」

勇は女性に対する癖なのか笑顔を浮かべる、先ほどの恐怖が残つていなかと晶は感心するばかりである。

「よ、よろしく、お願ひします……あー」

直視したマリアは顔を赤らめ恥ずかしげに俯いき、そこでずっと手を握っていたことに気が付いたのだろう、慌てて離れていた。

「あ

晶は思わず声を上げる、視線の先ではマリアが着ているローブの裾を、自分自身で思い切り踏みつけている姿があった。当然そんな状態では体勢が持つはず無く、後ろへ倒れかけているところであった。

「わー、うわわわわー！」

足が使えず立て直そうと試みているみたいだが、当然無理な話であり後ろへ倒れしていく。

「おいー！」

勇は素早く手を伸ばし抱き寄せる、さすが勇だと感心しながら晶は傍観していた、こうなることが分かっていたのだ。

「大丈夫か？」

「はい、大丈夫で……」

勇に問われマリアは答えるが途中で硬直する、勇の顔を近くで直視し優しく抱きしめられた状態だからなのだろう。

マリアの顔は瞬時に真っ赤に染まり、アウアウとよく分からぬ

言葉を発し、それを見ても勇は首をかしげているだけであった。

その様子を晶は気づかれない様一ヤニヤと見るばかりである。

（やつぱり何処でも勇は勇だな、異世界でもその何処かの主人公ばかりのフラグ立ての早や、楽しめそつだ……）

実は勇に惚れた女性達の「コタ」「コタ」を楽しんでいるのである。

女性達にアドバイスという形で裏から色々と手を出し、引っ搔き回すのである、勿論殴り合ひなど酷くならないように調整はしていた。

「……」

「……」

「……何時まで抱きついているんだ？」

なかなか動かない一人を見かねた晶は声をかける。

「いや、マリアが離してくれなくてな」

勇は困り顔で未だ硬直しているマリアに視線を送る、しかし晶には自分から離さない理由が分かり半日になっていた。

「そう言いながらも堪能しているんだろう？」

勇は親指を立て歯が光らせ笑顔を作る、よほどいいものだったのだろう。

「まあいい……」その後せせりふをだらうなー。」

ため息をついたままでは埒が明かないと晶はマコアの肩を吊り、  
いまだ顔を赤らめて硬直してこるマコアの正気を取り戻せらる。

「す、すすすす、すみませんでした！」「めんなさい。」

コメツキバッタの如く頭を下げるマコアは晶は気にしないと手を  
ふり、これからどうするかと落ち着かせるようにやつべつと聞いて  
いた。

その辺りの女性の扱いは上手になと思ひ晶であった。

「せつでした！」「Hが謁見の間でお待ちです、行きましょー。」

「どうやらマコアは思わぬ勇との接近に意識が飛び掛つてこたまつた  
のである。

氣を取り直しそのまま両開きの扉まで進むが開けず立ち止まつた、  
何事かと一人は首を傾げる。

「あの、この衣装は召喚用なので、着替えてきまー。」

恥ずかしげに顔を真つ赤に染め、そそくセトマコアが入つた別の  
扉に入つていく、その扉を見て晶はあつと想つて浮かぶ、自身が出て  
きた扉であった。

「やっぱつ更衣室だつたのか……」

扉がしまつた直後晶は呆れ顔になつた。

「勇、その姿は本氣で情けないぞ」

「今は晶しかいなから氣にしない、 それよりも静かに……」

勇がべつたりと扉に張り付いていた、更衣室だとわかり室内の音を聞き漏らさないようにしてこる姿みて、晶は肩をすくめた。

細かい装飾が施された冠をかぶり、真紅のマントを肩から掛け、口元に鬚を生やして見下ろす瞳は強い意志を感じさせる、一目見ただけでも王と分かる威厳がそこにはあつた。

王様が居る位置から数段下がつた場所で、謁見用かはたまた神官用か白い衣装に着替えたマリアが膝を付く、晶と勇が後ろで見よう見まねで同じ体勢になつている。

「流石に物凄く注目されるな」

勇は周りに聞こえないようするためか隣にいる晶に小声で話しかけた。

晶も厳格な場所で話すのは不味いかと最小限に声を抑える。

「それは勇だから、といつもあるだろ？、オレには氣付いて無いみたいだからな」

謁見の間の両壁には騎士やら貴族と思わしき人達が居る、皆勇に注目するだけで一度たりとも晶へ向かなかつたのである。

（勇には存在感あるからな）

田立ちたくない晶は密かにほくそえむ、さすがに存在感の無い晶でも田立つ場所では気付かれていた。

しかし容姿が良い勇が居ると注目され、存在感の無い晶はますます分かりにくくなるのである。

真正面に居る王様ですら勇を注視し、晶の存在に気がついていいのか視線を感じなかつたほどである。

「マリアよ、其の者が勇者か？」

天井が高く大勢居る広い謁見の間に渋い声を響かせ、王が勇を差しながら問う。

「はい王様、名を田立下勇と申します」

マリアが片膝を付きながら答えた、周囲からぞわざわと囁き晶にとどく、「あれが」と希望に満ちた声と「子供じやないか」と心配そづな声は半々といつた具合である。

「静かに」

片手を上げ静止する王のたつた一言で静かになる。

「では勇よ、我々の為に魔王を倒してくれるか?」

「はい! 必ずや倒して見せましょ!」

勇は明朗にかつ全員に聞こえるように声を張り上げ答えていた。  
そのようすに王は満足げにうなずく。

「勇者よ、この者達を連れて行け」

左右の人ごみの中から一人の女性が前に出るのを晶は視界に捉えた。

右側から出てきたのは二十代後半の大人びた女性である、腰まで届く赤い髪を首元で縛つており、凛とした顔立ちでつりあがった真紅の眼は鋭い眼光を放っている。

高い身長の体はスラリとして猫を思わせ、腰に剣を挿し、動きやすさを重視した鎧を着た騎士姿はとても凛々しい。

反対側からは晶と同い年ぐらいの少女であった、鍔の広いとんがり帽子に黒いマント、袖口が大きく開いたローブから所々見える神秘的な白い肌の全身を覆っている。

いかにも魔術師といった姿で緑のショートカットが僅かに見え、深緑の瞳の目元に魔術的な刺青は知的な雰囲気を感じさせる、無表情だがそれでも見ほれるほどの美貌であった。

「騎士ユナ・キ・ロードと魔術師メイ・フォー・マグダリアだ、二人とも優秀だと自負している、本当なら最高の騎士と魔術師を宛がえるのだが、なにぶんこの国も一枚岩ではないのでな……」

苦笑する王様であったが、晶はなんとなく理解した、どんな組織であるかと派閥は存在するものである。

「足手まといにはならぬ、協力せよ。そして神殿にて宝玉を受け取るがよい、詳しいことはマリアに聞け、では頼んだぞ」

ユナとメイを連れ謁見の間を晶達は退出し王との謁見は終了するのであった。

## 脇役一

神殿といわれるだけにそこはとても神秘的な場所であった。

石で作られた円柱が立ち並び、同じ素材の天井はとても高く作られている、一番奥には半円状に浅く水が張られており、波一つ浮かばずに静寂を保ち神殿内を冷やしていた。

水が張られた半円の中心に、純白の玉を掴むような複雑な形をしている彫刻が立てられ、ステンドグラスの天窓から射す光が非常に幻想的であった。

「書物を持つてきますので、じばしお待ちくださいね」

そう言いながらマリアが勇へ笑顔を向けて別室へ向っていく、その間に鎧姿のコナと黒刃くめのメイが勇と正対する。

「改めて名乗させて貰います。騎士のコナ・キ・ロードです、コナと呼んで下さって結構です」

「魔術師メイ・フォー・マグダリアです……メイと呼んでください……」

コナは勇者相手故か、はたまた騎士という立場からか折り目正しく握手を求め、メイはゆっくりと喋りながら頭を下げる。

「田舎下男だ、勇者だからってかっこまらないでいいぞ、俺の方が年下だしね、これからようしなくな」

微笑を浮かべる勇を直視した一人は思わず見ほれているようであつた。

それを見た晶はマリア、ユナ、メイの三つ巴になりそうな予感ににやけてしまつ。

その事がばれると色々と勇の観察に支障が出るので、手で口元を隠して様子を眺めていた。

「次は自分ですね」

流石にずっと黙っているわけにもいかないと晶は顔を引き締め、初対面ということから敬語で話し頭を垂れる。

ユナとメイは怪訝な様子で晶を見たあと途端に警戒心を表した。

「貴様！ 何処から侵入した！」

ユナがすぐさま腰に差していた剣、バスターード・ソードを素早く晶の首筋に宛がい、メイは持っている節くれだつた身長ほどの長さの杖を向ける。

「ええ！？ ちよー ちょっとー！」

武器を向けられるとは思わなかつた晶は、降参とばかりに素早く両手を上げた。

刃物を向けられるといつ事態に肝を冷やし、二人の苛烈な視線からおかしな真似すると即刻首が飛ばそつだと晶はつばを飲み込む。

「まつてくれ！ メイも杖おろしきれ！」

勇がすぐさまユナを後ろから羽交い絞めにして押さえ、メイには視線で訴えているようだった。

暫く重苦しい空気が辺りを包み込む、晶がじっとして何もしないことが功を奏したのか、一人は渋々といった様子で武器を下ろすが、いまだ鞘に戻していないことから警戒は緩めていないと悟った晶は、何が切欠で又刃を向けられるのかと戦々恐々としていた。

「突然現れた…… 暗殺者か新たな人型の魔物かもしれない……」

「…… 今まで影薄いとか色々言われたけど、魔物まで言われたのは初めてだ……」

メイの鋭い視線と共に魔物呼ばわりされ、ショックを受けた晶はガックリと頭を垂れるのだった。

「オレはハ頭晶です、勇の親友やっています」

「親友？」

咳を一つして襟を正した晶に、ユナは勇に首を向けて真意を問いつているようだつた。

勇が重々しく首を縦に振り、肯定するのを見たユナとメイは武器を戻していく、なんとか危機的状況から脱した晶は一息つくのであつた。

「そうだったのか、知らないとはいえ勇殿の親友に刃を向けてしま

「うとけ、すまなかつた」

「「」めんなさこ……」

「いえいえ、自分が癖で氣付かれ「くく」しているのもありますから」

申し訳ないのか頭を下げる一人に、晶は氣にしなくていいと手を振る。

「なあ晶、何時までも敬語じゃ大変だろ？ 仲間になるんだ、普通に話せよ」

勇の台詞に晶は分かつていないとばかりにため息をついた。

「誰とでも直ぐ打ち解けるお前と一緒にするなよ……」

「だよな？ と一人に同意を晶は求めるが、返ってきた反応は違つた。

「いや、勇殿の言つ通りだ、普段どうぞ構わない」

「同じく……」

「……まあ一人が了解したなら、普段道理にするよ」

自分がおかしいのかと疑問に思つ晶だったが、深く考えても意味が無いと疑問を押し込み了承するのだった。

「ところで晶殿はいつから居たのだ？」

神殿の中に既に居たことから不思議に思つたのだろう、コナは晶に疑問を投げかける。

「最初からだけど？」

「最初……から……だと！」

晶の答えを聞いたユナは戦っていた、先ほどまで気付かなかつたことに驚いているのだろう、少し眼を見開いているメイも口を開いた。

「神殿に着いた時から……？」

「ああ」

「まさか神殿に来る途中も……居た……？」

「勿論」

「もしかして……謁見の間の時も……？」

「当然」

「この瞬間つて結構面白かつたりするよなと内心ほくそ笑みながら、メイの問いに晶はにこやかに答える。

「その時から居たのに気がつかぬとはー、騎士失格だー！」

勇が居た状況なら仕方が無いが、それでも気が付かないようにもしていたため、頬を搔き申し訳なさげに笑うばかりである。

両手両膝をついてユナは物凄くショックを受けていたようであり、メイも分かり難いが結構落ち込んでいるようだ。晶には見えた。

「二人ともどうしたの？」

別室から白く分厚い本を片手に戻ってきたマリアが、ユナの姿を見て首をかしげる。

「晶殿にまつたく気づいていなかつた事に……ちよつとな……」

「あ……」

晶の存在感の無さを既に体感していたせいか、マリアは納得したように頷くのであった。

「さて、勇者様、宝玉はあります」

マリアが神殿の奥にある、水が張られた場所の縁に立ち、手を向ける。

勇は視線を向けると、そこには水面から樹木が伸び、白い玉を掴むような形をした神秘的で真つ白な石の彫刻があった。

「あの白い玉が宝玉です、勇者様のみ触れることが出来るといわれています。周りの水には特殊な魔術で勇者様でしか渡れませんので、

私達では仰座に近づく事はありません。勇者様お願いします

マリアが促すが勇は若干躊躇していた。

「あれを取りに行くのか……」

特殊な魔術が施されていると聞いたため、勇は勇者の証があつても慎重にならざるをえなかつた。

それでも行くしかないと気合を入れなおし縁に立ちそつと足を入れる、非常に浅く作られていた水面に波紋が広がるが何も起きる様子は無い。

勇は安堵のため息をつくが、まだにかかるのかもしれないと身長に水面を歩く、しかし何も起こることも無く無事に彫刻の元にたどり着く。

「そうか……何も起きない……か……」

勇者と確実に決まつたことが感慨深く、心の中で決意を新たにした勇は口を開じ、一つなづく、そして躊躇することなく宝玉を抜き取つた。

「何事も無く取れてよかつたな」

戻ってきた勇に晶は賞賛を送る。

「そうだな、しかし実際に勇者以外が入つたらどうなるんだろうな?」

ふと勇は疑問を口にする、同じことを考えていたのか晶は縁に立ち水面を見下ろしていた。

「水に魔術がかかっている、とにかくだけ……どんな物なんだ？」

勇は首をかしげながらマリアに尋ねる、その間に晶は水面を見下ろして田を凝らしているが、勇から見てもとても浅く清んだ水でしかなかつた。

「それは……」

「……それは？」

マコアが口にくる、その様子をみた勇はそこまで危険だったのかと冷や汗をかいていた。

何事も無かつたとはいえ、畠のを憚りれるほどに危険な場所を通つたのだ、肝を冷やすのも無理は無いことである。

「……神聖で誰も触りつけてしませんから、実は分からぬのです」

「わからぬのかよー。」

テヘツと小ちく出すマコアに勇は手の甲でツツコツを入れるのだった。

「入つてみたらどうだ？ もしかしたら、お前も勇者かもしれないぞ？」

勇が冗談交じりに促すが晶は馬鹿言つたと手を振った。

「どうこいつ」とだ?」

コナが怪訝な面持ちで勇に問いかける、召喚時に居なかつたのだ  
当然の質問だらう、勇は召喚された時のことを探い摘んで説明した。

「つまり晶も勇者である、とこう可能性は無いとは言い切れない」

証はないが、召喚されたことには変わりは無いと勇は胸を張る。

「何度も言つけどそれはあり得ないって、なんだったら聞いてみる  
か? お三方、オレと勇どちらが勇者に相応しいと思つ?」

客観的にも判断してもらうのが一番だと思ったのか晶は女性三人  
に問いかけ、その答えとしてビシ! と三人揃つて勇を指差すのだ  
った。

「ほら見る、自分の立ち位置は弁えているつもりだ

「いやいや、それは皆の意見であつて決まつた訳じゃないぞ!」

「お前ほどの男が選ばれるのは当然として、オレは勇者になれる要  
素は欠片もないわ!」

「勝手に決めるな!」

売り言葉に買い言葉、晶と勇は言葉を荒げだんだんと白熱してい  
く。

「分かつた！ だつたら男らしく『イツでビちうが行くか決めようか、俺が勝つたら行けよ！』

勇は獰猛な笑みを浮かべながら拳を握り突き出した。

「いいぜ！ 後悔するなよ！」

その意味を理解した晶も鼻で笑うと拳と掌を打ち合わせた。

「ちょっとまで！ 一人ともやめ 」

口喧嘩程度だと傍観していた三人だったが、突然始まつた状況がまずいと判断したのだろう、ユナが止めに入つたが残念なことにすでに手遅れであつた。

一人は構え、緊迫した空気が周りを包み込む、まさに一触即発であつた。

「ジャン！」

晶が声を張り上げ。

「ケンー！」

勇が裂帛の気合とともに叫ぶ。

「「ポンー！」」

余りの展開についていけないので、呆然となるマリア達三人である。

「ば、馬鹿な！ オレの豪熱マシンガンパンチ（グー）が負けるとは！」

「フフン！ 俺の爆熱ゴッドフィンガー（パー）は不敗だ！」

膝を付きショックと絶望感に震える晶の顔を尻目に、勇は勝利した開いた手を天高く掲げる。

「紛らわしい！」

スペアアアアアアン！

勇はユナがいつの間にか手にしたハリセンの衝撃を受け、同じく晶も後頭部を叩かれている、しかし二人はいいツツコミだと親指を立てる姿は非常に清々しかった。

「まあ冗談はさておき、正直気にはなるな」

「そつだな、でも危険を冒してまで調べる意味は無いな

勇に同意しながら晶は水面を観察し始める。

「得体の知れない魔法生物がいて、食われたりするのか？」

超常現象や不思議な事が気になるのだろう、晶は目を凝らしていった。

「ん？ なんだ？」

何かをとらえたのか晶は前のめりになり水面に顔を近づけ注視する。

「どうした？」

勇は問いかけながら晶が見る水面へ後ろから覗き込む、そのとき曲げた膝が晶の背にあたった。

「ちよ　　」

水面を覗き込む状態だった晶に、その膝の一撃は体勢を崩すのに致命的な一撃であった。

「晶！」

咄嗟に勇は服を掴もうとするが掴めず、突然の出来事にそのまま晶はなすすべなく水面へ倒れるのだった。

ドブンと音と共に晶の視界は全て水に埋まる。

それは水面に顔を沈ませただけではなかつた、頭頂部から足の先まで全てが水面下に沈んだのである。

「がほ？」

ありえない光景に晶は水中にもかかわらず声を出すが、音となら

ず泡となつて消えるだけだつた。

晶の身体は全て水の中につつたにも拘らず田を見開いていた、目の前に少女がいたのである。

脳が状況を理解できていないせいか、はたまた少女の姿に危機感を感じないせいなのか、不思議と晶はその少女をじつくりと観察できた。

少女は掌の指先から手首ぐらうの背丈で、妖精を髣髴とさせる可愛いものである。

羽は無く、肌は白いが髪、服、瞳が淡い青であり、真っ直ぐ伸びた長い髪と、長袖の足首まで届くワンピースの裾を水とは関係なく、まるで空気中のごとくはためかせながら漂つっていた。

晶は呆然としながらも首を回すと田の前以外にも少女は居た。

(なんだあれ!?)

沈んでいく青い少女を田で追い、下を見ると眼下には深海を思わせるほどの暗闇が広がっているが、よく見るとそこには同じ姿の黒色の少女が浮きも沈みもせず蹲つていた。

(ぐ……苦しきなつてきた……で、出口は!?)

驚きで意識外だつたが酸素が足りなくなつた晶は流石に息が続かなくなり、危機を感じ身体をなんとか捻り出口を探す。

(光!？ てことは光源に水面があるはず)

真っ暗ではなく光が差し込んでいたことから、晶は水面を予測し見上げると半円の水面が見え全力で泳ぐ。

(やばい！ 動き難い！)

しかしまとわり付く衣服と魔術の効果かやたらと粘性がある水で思うように進めないでいた。

(あと……少し……)

遅いながらも何とか手首から先は水面からでるが、予想以上に体力を要していたのだろう、限界に達し、ついには晶の視界が暗くなる。

「げふおー、げふおー！」

「晶殿大丈夫か？」

ユナに背中を擦られながら晶は全身ずぶ濡れで咳き込んでいた。

ギリギリたどり着き水面から手を出したのが良かつたのだろう、手を掴まれそのまま皆に助け出されたのである。

「なんでこの深さで沈むんだよ」

晶の無事を確認した勇が水面に近づき水を確認する。

見た目には体を倒しても全身入るには無理なぐらい浅い、不思議極まりないだろ？。

「ゲホ！ それが、選定で弾かれた、結果だろ？、ゲホ……」

両手をつき息を整えながら晶は推測する。

「ふ……とこひでこいつは何だ？」

呼吸が落ち着いた晶は立ち上がり肩に乗つてている青い妖精の少女に視線を向ける。

水から出でていても見え、晶は思わず凝視してしまい、視線に気が付いたのか少女も振り返り目を合わせてきた。

子犬の様に円らな瞳で、若干見上げるような愛らしい姿に、晶はついつい指で小さな頭を撫でる、気持ちいいのか青い少女は目を細め大人しく撫でられているのだった。

「こいつらって……？」

メイが首を傾げる。

「いや、こいつ等だよ、この少女達」

晶は周囲を見回すと茶色の少女が地面を闊歩し、白い少女は光が射している場所を緩やかに飛行している。

青い少女は緑の少女と共に風に煽られ漂つっていたり黒い少女の隣で座つていたり、赤い少女は日が射している場所で陽気に踊つていた。

メイと晶の間に白い少女が緩やかに飛行してきたので、晶は優しく襟を摘まむ、行き成り掴んで驚くかと心配したが借りてきた猫のようになつて白い少女は大人しくしていた。

掌に乗せると女の子座りになり、そのままメイに見せるが晶の掌を見るメイはいまだ首を傾げるだけだった。

「く！ 後遺症がのこつたのか！？ この近くに医者は居ないか！？ いや精神病院か！？」

「お、おい！ オレは大丈夫だつて！」

いきなりの精神病患者扱いに晶は一步後退するが、勇に逃がさないと腕を確り掴まれる、晶は振りほどこうとするが元々体力に差があり無理であつた。

「どこの大丈夫なんだよ！？ 少女なんて何処ににも居ないぞ！」

「そんな馬鹿な！ ここに居るじゃないか！」

ありえないことだと驚愕する晶だったがメイ達の様子を見て、自身以外見えていないようだつた。

「酸素不足から脳が少しやられた可能性があるな……しかしみえる幻覚が少女とは……そこまで少女に飢」

「飢えている」とでも言いたいのか、この野郎

変態と決め付けようとする勇を睨む晶の眼光は鋭い。

「あの……医者？ 精神病院？ ですか？ よく分かりませんが、治療するなら私がしましようか？」

「頼む！」

「いらん！」

マリアの申し出に勇は頭を下げるが、晶としては平常なので治療する必要が無いと考へているのだ。

「晶！ 大人しくしている！」

勇を振りほどいて暴れる晶の足元に、茶色の少女が近寄り座り込む、突然のことには晶は何事かと思わず注視する。

「「おわー！」」

二人は晶に絡みついた物に驚き声を上げた、周囲の茶色い少女が小さな手で地面と軽く叩くと、地面から根っ子が伸び晶の身体を拘束したのだ。

「何だこれ！ う、動けん！」

「大丈夫……拘束する魔術……私がかけた……」

全身に力を込めて、脱出を図るうとする晶にメイが説明する。

「そりなのか？ ありがとう助かるよ」

「……」

（ええーー！ こんな時に落としているな！ オレに余裕があるときにしてー）

勇に大人しく頭を撫でられるメイはなんだか嬉しそうである。

「あの…… よろしいですか？」

勇が撫でているのが嫌なのか、マリアが若干不機嫌そうに勇に申し出していた。

「存分にやつてくれ」

「なにが存分にだ！」

親指を立て、歯が光りそうな笑顔で了承する勇に、威喝する晶だつたが全く効果が無かつた。

「分かりました」

勇に頼まれた事が嬉しいのだろう、笑顔で頷くマリアだったが、晶に振り向くがその瞳は酷く冷たい。

あまりにも冷ややかな視線と、身体を縛られた状態から抜け出せない事から晶は悟り大人しく治療を受けたことにした。

「なんでそんな物を見るような田つきなんですか？」

「なんのことでしょうか？」

治す者の視線かと恐怖しながら敬語で話しかける晶だったが、マリアの返答は瞳同様に冷え切つており、そのまま晶の額に手を翳す。晶は大人しくすることにして、他に見るものがいため傍観していると又も不思議な光景を目にした。

白い少女がマリアの手に一人来ると両手を翳したのだ。

マリアの手と白い少女の手、そして晶の額の僅かな空間に白い光の玉が現れ、それは淡く輝き暫くの後消えるのであった。

（茶色い少女といい、白い少女といい、ちつきからなんだ？　こいつら魔法と関係しているのか？　）

晶は疑問に思いながら呆然と白い少女を田で追う、白い少女は先ほどの光が消えたあとジッとマリアの顔を見ていたが、反応が無いと分かったのか又どこかへ飛んでいった。

「これで大丈夫だと思います」

晶の時とはうつて変わってマリアは嬉しそうに勇へ振り向く。

「どうだ？　まだ見えるか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「いやかに答える晶だが、その視界には相変わらず少女がうろついていた、しかし見えると言えば又面倒くさい事になりそうだ」と晶は判断し、直ったことにした。

「マリア、ありがとう」

「い、いえ！」

煌く勇の笑顔を向けられ、マリアは顔を真っ赤に染めるのであった。

「これってどうやって使うんだ？」

根っ子から開放された晶は動かして身体をほぐしていくと、勇が宝玉を遊びながら首をかしげていた。

手の中には小さな白い宝玉があり、指に挟んで手にかざしてみたり、覗き込んだりしているがまったく変化はない。

「念じれば装着できる、と書物には書いてあります」

マリアは白い表紙に一行ほど金の文字が書かれている本を開き、数ページめぐり読み上げる、その様子を見ていた晶はふと疑問が沸き起つた。

「「いへこいつのは伝承とか、口頭で伝わっていたりするのでは？」

「なんでも」の書物は初代の勇者様から「使用になられていたものらしく、宝玉の使い方などが書かれています」

書物から眼を離さないマリアの答えに晶は納得するが、持つている本を見ると新たな疑問が浮き上がった。

「初代勇者の事が書かれているか？ どれぐらい昔か分からぬいけどそれ程本が古くは無いよな？」

晶はじっくりと本を観察するが、その本は日焼けし変色している部分が無かつた。

大事に保管してあつたとしても多少は痛むものではあるが、その様子が殆ど無いのである。

「初代勇者様はおよそ二千年前の方です、勇様で五代目ですね、これは古くなる度に新しく清書しています、本は何もされていない普通の書物でしたから」

晶はなるほどと頷く。

「それにしても……結構アバウト……」

「だな」

メイの意見に晶は同意していた、念じるといわれても、どのようにも感じればいいのか分からぬものである、しかし突然勇が鎧に覆われた。

「なにをしたんだ？」

平然と聞いているが突如姿が変わった勇に晶は内心驚いていた。  
「装着とこいつことからはとりあえず、特撮を想像して変身と念じて  
みた」

勇が自身の体を見回し、同じく晶も観察するとそこには真っ白な  
顔も覆う全身鎧とレイピアを装備した勇の姿があった。

竜の姿をモチーフにした装飾が施され所々棘のよつなものが有り、  
兜は竜の顔を模していて口を開く形だった。

口の位置に勇の顔があり、その顔は目以外を覆う簡素なマスク  
になつていて。

「初めて見るが全身鎧だったのか……勇殿支障が無いか動かしてみ  
たらどうだ？」

「そうだな」

ユナに言われたように勇は肩を廻し、足の関節も廻して筋を伸ば  
す、そしてどこかで見た動きを始める。

「ラジオ体操かよ！」

晶はおもわず勇の頭を叩いたが全身鎧の勇である、拳から伝わる  
痛さに蹲る晶なのであった。

「大丈夫か？」

晶の痛がり様に勇の声が申しわけそつになっていた。

「しかしこの鎧は凄いな、動きを阻害しないし物凄く軽いぞ、しつかりとレイピアも付属しているしな」

「流石勇者が使用していた鎧といったところだな、原理は分からないうが装着する時に勇殿の体格に合つ様になつてているのだろう」

勇が腰に差してあつたレイピアを抜き、改めて身体を動かしていた、その様子をユナの感心するように観察している。

「とにかくマリア、解除はビリすればいい？」

レイピアを鞘に戻し勇はマリアに問つ、一通り動かし何も違和感が無かつたのだろう。

「はい、同じく念じれば戻るそつです」

マリアは本をペラペラとめくつながら答える。

「又アバウトな、初代勇者は本能で使用していたのか？」

「あはは……」

勇の意見にマリア自身も少し同じことを思ったのか、笑つて誤魔化していた。

「じゃあ解除つと

鎧が勇から離れ、一瞬で宝玉へと戻つていった。

「つ～む」

顎に手をあて悩み始めた勇に晶は声をかける。

「勇、どうした?」

晶が顔を覗き込とその瞳はとても真剣な目つきである。

何か問題があるのかと晶は気を引き締める、勇は何かを決意したのか勢いよく顔を上げ、おもむろに宝玉を握り締めた。

顔の横に両手の握り拳を持つていき、力を込め強く握つたあと素早く腕を動かす。

「変身!」

「『ど』の『ラ』の『ジ』のブラックの変身動作なんだよー もつき物凄く真剣な瞳はなんだつたんだー!」

腹の底から鋭く叫び、勇の後頭部に晶はパグンとび蹴り一閃ブチかましていた、先ほど手のソック『ハリ』はかなり痛くそこから学んだ結果である。

「鎧着たときの突つ込み酷過だねー!」

「無傷で済んでいるからこそだー!」

勇が後頭部をおさえながら詰め寄るが、晶は肩に手を置き清々しい笑顔で親指を立てていた。

「カツココ……」

二人のやり取りの合間に縫つように感嘆の声が教会に響きわり、その音源へ一人が振り向くと田を輝かせるメイの姿があつた。

「変身の動作……カツココ……もづ一回……」

「え……今は思いつきでやつただけだから、改めてやると恥ずかしいのだが……」

ジッと熱い視線を合わせているメイに勇はたじろいでいた。

助けを求めるように勇はユナとマリアに顔を向けるが、そこには同じく期待の眼差しの一人が居た。

「……」

「……」

「……」

「わ、わかった」

メイは余程嬉しいのであらつ、花が開く様に満面の笑みを浮かべていた。

根負けした勇は鎧を解除する、その顔は少し赤い、メイ達を一瞥

したあと小さくため息をついた、恥ずかしさを吹き飛ばすためか勢よく構えるのであった。

ぱたつと変身動作を見ていても意味が無いと、晶は別のものに意識を向ける。

（さつきから見えてこむ）の少女達はいつたい？ 妖精みたいなものか？）

晶が溺れでから見えるようになり、魔術行使すると何処からか寄つて来るので、魔術に関係しているぐらいしか分からなかつた。

先ほどから漂つてゐる少女を田で追つ、緑や白の少女がマリアやコナ田の前を通り、視線が一瞬も行く様子がまったく無い、といふことは見えないのだ。

先ほど死に掛けた者が見えていない物を見えていふと言つて、それが少女だと言うのだ、精神に異常をきたしていふとされるのも無理は無い。

改めて思い返す晶は自身の滑稽さに苦笑すると同時にふとある仮説が浮かんだ。

死にかけて見えなかつたものが見えるようになる、それは幽靈が見えるようになると同じではないか、とこつことであった。

自分しか見えないのでとても少女達のことは周りに言えなかつた。

「どうしたの……？」

小さな少女の事に關して考えにふけっていた晶は声をかけられ思考を中断、声をした方に振り向くといつの間にか首をかしげているメイがいた。

「なんでもない、といひで勇は疲れるほど繰り返したのか？」

メイの後ろに肩で息をする勇が田に入つた晶はちょうど二二三と、追求を避けるため話を変える。

「おうよー、何度も頼むからー唔、ー唔はもとよりく三からアマゾン、昭和ライダーのオンパレードやつてやつたぜー。」

晶に向かつて親指を立てる勇の姿はやり遂げた感がすこかつた。

「素晴らしかつた……」

メイの表情の変化は無いが少し赤い、言葉の雰囲気から若干興奮気味のようであった。

「この宝玉一つで魔王と戦えるのか？ 俺の戦闘技術とか経験が必要なのは分かつているが……」

勇が自身の鎧姿を見下ろしながら疑問を投げかける。

勇者が使用したと伝えられる物だけに、防御性能に問題ないだろ

「つと晶は見当が付いていたが、外からでは身体能力が上がった様子は無く、立派な鎧と細剣としか感じられなかつた。

「それだけではまだ駄目のようですね、今は封印状態なので世界の何処かにある鍵で解かないといけません」

マリアが本を片手に口答した。

「世界の何処か？ なにか情報等はないのか？」

勇と同じ事が聞きたかつた晶も渋い顔つきになつてしまつ、何もなしで探すとなると世界中くまなく探さなければいけない、世界は広いものである。

あてずつぽうこ探すと途轍もなく手間がかかるのが田に見えた。

「え～と……これかもしけません、先の錠、灼熱と砂の世界に眠りし石の蔵、影に籠りし空間にて眠るだろつ、後の封、凍てつく吐息に晒されし山の恵み、深く沈み、青き世にて田覚めを待つ」

全員に聽こえるようにマリアは朗読する。

「先の錠と後の封、封印は二つか……」

「そして解く順番も決まつてゐるみたいだな？」

「ナの言葉に勇が続け、なるほどばかりに晶も頷いていた。

わざわざ先と後と付くのだ、順番が決まつてると考えていいだ  
れい。

「先に行く場所は灼熱と砂から砂漠の可能性が高そうだな。凍てつく吐息は吹雪か？ 北の寒い地域位しかわからないな……」

漠然としかが分からぬいためだらう、勇は少し不安げな声を上げる。

「砂漠はオキ砂漠がある……寒い地域は範囲が広すぎぬ……」

「じゃあ……始めはオキ砂漠か？ 他の細かいことは其処の近くにある村や街の伝説とか、言い伝えとか聞いて推測するしかないな、勇者に関係することだから何かあるだらう」

メイの情報から目標をきめた勇の意見に全員頷く。

「その前に、勇が何処まで通用するか試したらどうだ？」

行き成り都から出て戦闘するのはじつとかと、晶が手を小さく上げ口を挟んだ。

「そうだな、勇殿一つ手合わせ願おうー！」

やはり騎士とじつだけあつて戦闘に興味があるので、ユナが嬉々として願い出た。

「おうー、良いぜー！」

勇も楽しみなのだらうと豪氣良く答えていた。

大きな広場には所々に木で出来た案山子のような人形が立っている。

晶が周囲の壁に目を配ると多種多様な武器が置かれているが、不必要に怪我を増やさないためか一部を除いて木材で作られていた。

そこは修練場と呼ばれている場所である、流石に神殿で模擬戦を行う訳にもいかないと此処へ移動したのだ。

「実はユナ、お前に興味があつたんだ」

勇はフェンシングをやつているだけに、強いも者との勝負には興味があるのだろう、しかし目を細めながら言つた台詞は晶が聞いても告白じみたものであつた。

「なー なにをいきなり！」

勘違いしたのか、途端にユナは顔を赤く染め上げ仰け反つていた。

自身が言つた言葉がどのように相手に聞こえたか、勇の態度で分かっていない事が晶には一目瞭然であつた。

「なにをいきなりって、なにが？」

「…………」

首を傾げる勇の姿から同じく理解したらしくユナは、顔を赤らめ

たまま田を逸らして押し黙る。

「わたしは神官ですけど戦えますよ」

「まだ頭を捻っている勇のそばにマリアが近づき軽く袖を引っ張っていた、マリアの期待が込められた眼差しから、コナに言った言葉を同じく言つてほしいのが明白である。

「ほほう、そいつは楽しみだな」

「あの、せつではなく……あよ、興味が……その……」

マリアがなんとか言葉を引き出したりと四苦八苦していたが、効果がなかつたため肩を落としていた。

そんなのじや勇には分かつもらえない」と晶は首を振る。

「では……始めるか」

咳を一つして氣を持ち直したコナは壁に掛けられた木刀を持ちだし、そして同じくかけられていた金属でできた練習用レイピア練習用のため先端が丸められている を勇へと放り投げた。

「おうー！」

コナが正眼に構えると勇も受け取ったレイピアをフェンシングの独特的の体勢になる、鎧を着けないのは純粋な戦闘技術が何処まで通用するかを図るために晶は推測した。

といえば晶は先ほどのマリアの行動を思い出し、楽しめそうだ

と密かに笑みを浮かべる、そして回りに気付かれないようにマリアへそっと近づく。

「マリアさん

「ひやー。」

落ち込んでいた時に突然声がかかった感じだったのだろう、晶が声をかけるとマリアが驚きの声を上げた。

「こいつ来たのですか！？ 驚かさないでください。」

「話しかける人に大概言われるよ」

どんな相手でも晶が普通に話しかけると大概驚かれていたのだ、しかし例外はいるもので勇と両親は慣れたのか驚かれる事は余り無い。

「少しいいか？」

「駄目です」

凍えるような瞳を向け容赦なく断るマリアだったが、晶は引かなかつた。

「勇に関する」と

「なんですか？ 早く迅速に即効で話しなさい」

勇のことを出した途端に、掌を返すマリアに晶は内心釣れたとほ

くそ笑み、声を小さくして話す。

「勇に誤解されたくないだろ？、だから少し離れよう」

晶は声を潜め、そしてそのまま勇に気づかれないと誤解をさせない離れていった。

勇に気づかれて晶とマリアがあ互いに気があると誤解をさせないためである。

「マリアさんは神官で、回復といった魔術関係が使えたよな？」

「はい、使えますが？」

マリアも同じく声を潜め、自然と周りに聞かれないように二人してしゃがみ込み、ヒソヒソと話す。

「なら勇が怪我したときが好感度を上げる時だ」

ジックと晶にて視線をおくるマリアは一言一句聞き逃すこと真剣である。

「実力差がどれ位有るか分ないが、多分一人が手合わせすると白熱して無傷ではいられないはず、そこで勇の傷を優しく癒せ…」

「貴方に言われなくとも行います」

侮辱されたと勘違いしたのかマリアの眉間にシワがより、厳しい視線を晶にぶつけてくる。

「たしかにそうだろう、しかしだだ治すだけで勇の場合効果は薄い、そこで癒した後二コリと微笑を浮かべる、それだけで大分違つてくれるさー。」

しばしの沈黙のあとマコアは一つ頷くと勇達一人の近くで待機し、その様子を見ていた晶は上手くいきそつだとほくそえむ。もやひづと画策しているのだ。

実は前の世界で勇を取り巻く女性達の「コタ」をこつちの世界で

元の世界では勇の周りに色々な女性がいた。

ウェーブがかつた赤い髪に青い瞳の整つた顔立ちのうえ優しさと武力の高さもある、まさに女性からすれば理想の一つだろう、当然勇に関わった女性たちは皆勇に惚れていつた。

それに伴い周囲の男性は嫉妬に駆られるのも当然の結果であり、最初は晶もその一人であった、だが勇にいじめを助けてもらつてからといつもの、行動を共にすることが多くなつていつた。

あまりに多くの女性に言い寄られる勇に、晶は嫉妬をするのが馬鹿らしくなつたのである。

晶が馬鹿らしくなつても女性は増える一方であり、それを見ていた晶はあることに気が付いたのだ。

嫉妬せずに見ていて意外と楽しいのである、それはまるでハーレム物の小説を見ている感覚だつたのだ。

それから晶はもつと楽しもつと影の薄さを利用して、裏から色々画

策するよつになつたのである。

ゆつくつと一人の間合に詰められていく。

「せいー。」

気合と共に勇は仕掛ける、狙つは鳩尾、一直線に突き出していた。

「はー。」

しかしユナが木刀で左へ受け流し、そのままレイピアを伝い滑らせるように首へなぎ払つてくる、とつとくに勇は後退し回避、大きく下がり間合いが開いた。

「やつぱり、これ位じや駄目だな」

「ふふ、当然だな」

まだまだ練習程度なのだ、お互いの楽しげに笑うがその周囲の空気が張り詰め、重くなつていいく。

先ほどよりも遅くじつくりと間合いを詰める。互いに機会をつかがい、次の瞬間ユナが一気に詰め寄つた、振るわれた刃は様々に変化している。

「せいー！ やあー！」

フヨイントを交え、上段、中段、下段と素早く的確に打ち込んでくるが、勇はいまだ捌けていた。

「なんのー。」

勇も負けずそれらを素早く回避、受け流す。

僅かな隙を見つけて鳩尾や喉など急所を狙つていぐが、ことじこと弾かれていた。

「はあああああー。」

「おおおおおおー。」

二人の裂帛の気合と共に速度があがる、蝶のよつて舞い蜂のよつに刺す、互いの攻防が目まぐるしく変化していく姿は正に演舞であった。

「いぐぞー。」

拮抗状態から脱するためかユナが一気に攻め始め、素早く繰り出し勇の反撃を封じる。

あまりの猛攻に全て防ぎきれなくなり勇の体に所々掠り始めた、好機と思つたのだろうユナは回転数をさらに上げる。

急所は回避している勇の体力に限界がきた、ついには踏ん張りが利かなくなりバランスを崩す。

「もうつた！」

「まだだ！」

ユナは一気に振り下ろす、しかし強引に体勢を崩したままやぶれかぶれで勇が振り払ったレイピアがぶつかり、激しい衝突音と共に二人は弾かれるように離れた。

「はあ、はあ、流石勇殿」

「ぜえ、そ、そっちこそ」

息を切らせ二人の顔が愉悦に歪む。

「ふー、これで最後だ」

ユナは正眼に構え直しながら呼吸を整え始めると、気迫が増しているのが勇には肌で感じ、何が来ても対処できるよう気合を入れ迎え撃つ態勢をとった。

「はあ！」

大きく一步踏み出し大上段から振り下ろすと同時に、切つ先から青白い衝撃波が地面を抉りながら勇に襲い掛かる。

勇は驚いたが一瞬で気を持ち直し、レイピアを横に構え衝撃に備えるが衝突し空気が爆ぜるとともに勢いよく勇が吹き飛んだ。

「うぐ、な、なんだ今の？」

身体が痛むが、勇はなんとか上体を起します。

「熟練の戦士なら、誰でも使える、まだやるか？」

リスクがあるので、切つ先を向けるコナは息が荒い。

「無理！ 僕の負けだ！」

体力の限界と身体の痛みで立てそうに無い勇は負けを宣言して、力を抜きぐつたりと仰向けに倒れるのだった。

「大丈夫ですか？」

マリアが勇に素早く寄り添い優しく触れる。

「光よ、浄化の力をもって癒したまえ」 ヒーリング

マリアがそつと触れる手先から白く淡い光が見て取れ、傷が治りそれと共に勇の息も整っていく。

「へえ、傷だけじゃなく体力も回復するのか、マリア、ありがとう」「気にしないでください

勇は自身の体を見回して礼を述べる、傷が治ったのを確認したマリアは安心したよつな柔らかい笑顔を浮かべ、それを直視したのだ

るつ見ほれているよ「うな勇なのであった。

その様子を晶は凝視していた、マリアと勇を見て楽しんでいたが、別に気になるものが見えたのだ。

魔術を使使したとき飛行していた白い少女が近寄ったのだ。

（白い少女が魔術を手伝つた？　いやむしろ少女達が行使するほ？）

客観的に見れたせいか晶がかけられた時よりも詳しく観察できていた。

先ほどマリアの手先が光つていたとき白い少女が三人集まり傷へ手を翳し、手から発せられる光を当てていたのである。

光が当たる場所の傷は治療されていき、小さな足を懸命に動かして勇の周りを走り、傷を次々に治していったのだ。

「ナ」ヒーリングを施しているのを見るがやはり同じである。晶から見るとマリアが治すというよりも、少女達が治しているようであつた。

「そついえばメイさんは魔術師だよな？」

ふと魔術関係といつことで思い立つた晶は、メイに問いかけるとメイは頷きで答えた。

「すまんが、魔術を見せてくれないか？　実際に見ておけば、使わても動搖しなくなると思うのでだが？」

「そうだな、一度見ておきたいな」

勇が同意していたが晶の目的は言葉通りではない、色の少女達が魔術と関係しているか確認したいためである。

「分かった……」

メイは了承し案山子の人形に正対すると、持つている杖を軽く掲げる。

「火よ、燃え盛る炎をもつて焼き尽くせ」 ファイヤーボール

杖の先端から人の頭ぐらいの火球が現れ打ち出される、かなりの高速で飛び、人形に当たると爆発を起こし煙に包まれた。

風に吹かれ煙が晴れるとそこには頭部消失し、炎上する胴体を残す案山子があるだけだった。

「すげー！」

勇が興奮した様子で叫ぶ、その瞳が好奇心で輝いているのが分かる、褒められたメイは自慢げにちょっと胸を張っていた。

やはり少女達は魔術に関係してそうだなと晶は神妙な顔つきで結論をだしていた。

詠唱 火よ、燃え盛る～の部分 すると二人の赤い少女がメイに近づき、額ぐと杖の先端へ移動、唱えると同時に小さな紅葉の手を翳したのだ。

火球が現れ、そして少女一人は喜色満面の笑顔で転がし始めたのである。

火球が爆発した時は爆風に巻き込まれ吹き飛んでいたようだったが、これまた楽しそうであった。

攻撃の魔術を小さな少女が興じる、なんともシユールな光景である。

その後メイの近くに行きジッと見ていたが何処かへ行くのであった。

怪しまれないよう晶は全員から少し離れてしゃがみ込む、近くにいた青い少女に視線を向けると晶へ振り替えた。

ためしに小さくおいでと呼ぶと青い少女は晶に近づき見上げる。

（呼ぶと近づくな……青いから水関係？ 水が出せたりするのか？）

突如青い少女が両手を突き出したかとおもうとその手から、如雨露のように結構な量の水が出た。

（声に出した？ いやそんな覚えは……思考を読んだ？）

出し終えたのか青い少女が晶をじつと見詰める。

（せういえば頭を撫でると嬉しそうだったな）

選定の時に肩に乗つていた少女を晶は思い出し、青い少女にそつ

と手を伸ばす。

怖がるかと思つたがそのような様子もなく、そのまま頭を撫でると青い少女は目を閉じ気持ちよさそうであった。

「ありがと」

晶が小声で礼を言い、手を離すと少女は嬉しそうにお辞儀をしてどこかへと歩いていく、見送つた晶は次々に各色の少女を呼び、手から出してもらつた。

（ふむ、赤い子は火、青い子は水、緑の子は風、茶色の子は土、白い子が光で残りの黒い子は多分闇といったところか？ 使つてもらつてもオレが疲れないのはいいな）

両手の先から赤い子は火種を、青い子は如雨露のように水を、緑の子はそよ風を、茶色の子は拳大の石を、黒い子は黒い霧を、白い子は光を発生させていた。

戦闘に使えるか思つたが赤い子と茶色の子はある程度しか変えられず他の子は両手から形も決めることがら無理であった。

共通してただ出すだけなので、戦闘にはまったく使える様子は無かつたのである、ちなみに黒い子の霧を晶は触つてみたが何も感じず、思い切つて顔を突つ込むと真つ暗なだけであった。

（一人以上は無理か、さてオレのことはこれぐらいかな？）

勇に視線を向けると杖をもつて唸つてゐるが、どうやら魔法の使用を試してゐるみたいだった、しかし残念なことに少女が集まる様

子が無く、全く発動できる兆候すらなかつた。

## 脇役四

「ついでだ、魔<sup>まき</sup>技術<sup>じゅ</sup>も説明しておけ！」

勇の唸つている姿を見ながら思案顔のコナが提案した。

「魔<sup>まき</sup>技術<sup>じゅ</sup>？ さつき俺が吹き飛ばされたやつか？」

「そうだ、本来は鍛錬を繰り返し、自分の中にある魔力を感じ操るのだが……」

「安全のためかコナが答えながら、晶達から少し離れた位置で説明する。」

「あの……御免、魔力を感じるのはどうやるんだ？」

申し訳なさげに手を擧げる晶に、全員の視線が何をしていてと鋭く突き刺さる。

「さつき……説明した……」

「すみません、聞いてなかつたです」

少女達の実験をしている時に説明されていたのだが、晶は素直に頭を下げる。

「だつたら知らなくて良いのです？」

マコアの侮蔑の視線が痛い晶は申し訳なさで縮こまるばかりである

る。

「ナリ言ひなつて、晶にも教えてやつてくれないか？」

「わかりました！」

勇の一聲で明るく返答するマリアだったが、晶に振り返った時は打つて変わって、あきらかに面倒くさいと言いたげな顔であった。

「ハア……」これはグロウアの腕輪です

ため息をしながらマリアが渋々といった感じで手を出す。

掌の上には金色で装飾が一切無い簡素な腕輪があった。

「それは術者見習いが着けるもので最初の段階、魔力を認識するための物です。魔力とは……簡単に言つと空気中や体内にある、不思議な力が込められた小さな粒と思つて結構です、では着けて下さい」

魔力を操る才能が有つたとしても見えないものを認識するのは難しいもので、主に視界を中心に補助し認識するための道具がグロウアの腕輪であった。

「空氣中や人などから発せられる魔力を見ることが出来ますが、わたくしやメイの周りに何か見えますか？　コナは少し違つて見えると思ひます」

マリアに言われて腕輪を付け、目を凝らすが晶には何も見えない、続いてユナにも目を移すがやはり何も見えず、相変わらず小さな少女達が漂つていたり、座つていたり散歩していたりしているだけで

ある。

「何も見えませんね」

「そうなのですか？ だとしたら才能がまつたくありませんね」

「ぐふー。」

抉り込むよつた容赦の無いマリアの言葉に、晶は胸を押さえ地面に両手をついた。

「少しでもあれば……神官や魔術師などの周囲に、撒き散らす霧のよつて……騎士や戦士などは立ちのぼる陽炎のよつて……薄つすらと見える」

落ち込んでいる晶に視線を合わせるためだけ、メイはしゃがみ込んで補足する。

「たぶん……オレ達のいた世界には魔術は無かつたからな……そのせいだとおもつ」

礼を述べながらよろよろと晶は立ち上がり予想を立て、それが一番の納得できる理由でもあった。

「勇者様はありましたけどね」

「どれだけ優秀なんだアイシ」

勇の才能にうつとりとするマリアだったが、反対に晶は異世界に来てまで新たな才能が発見される勇の完璧ぶりに呆れるほか無い。

「では技の続きを説明するぞ」

説明が終わり魔技術の講義をユナが再開する。

「まず内にある魔力を感じ、それを体の何処か、又は武器に送り込み

木刀をゆっくり上段へもっていき、頭上で停止すると青白く光始める。

「刃についた水滴を飛ばすように……放つ！」

一気に振り下ろすと、切つ先から青白い衝撃波が撃ちだされるのを晶は見た。

しかし先ほども模擬戦と比べ大分小さいものだった。

「今のは分かりやすくゆっくりとやつたが、実戦では素早く使用できないと話しにならないからな」

一息つき構えを解くユナは先ほど勇に放ったときとは違い、それほど疲労が無いようだった。

「横に薙いだり、突いたりとか他にないのか？」

勇が疑問を口にする、同じ事を晶も考えていた。

上段のみだとすれば動きを見ていれば比較的避け易いだろう、もちろんフェイントをなど分かりにくくしたり、かなり速度で振った

りなど創意工夫されているのが当たり前だろ？

「いや、突きや横薙きもある。他にも身体纏わせて一時的に身体能力を上げることも出来る。聞いた話だと全身に魔力を回し気配を消すことも可能だそうだ」

コナの説明になるほどばかりに一人が納得しながら頷く。

「魔力を感じ」

早速実行し始めたのか勇は目を閉じ、レイピアを持つ左手、左半身を前に出した構えを取る。

「送り」

レイピアを前方に向け胸元に持つていぐ、するとゆっくりとだが刀身が光りだした。

「打ち出す！」

瞳を開くと同時に突き出す、その瞬間、先端から弾丸のように、細く鋭い青白い衝撃波が撃ちだされた。

ガツツポーズをとる勇は結構嬉しそうであったが少し息が荒くなっている。

「しかし意外と疲れるもんだな？」

感想を述べる勇に晶は呆れ顔であつた、魔力を知ったばかりなのに使用したのである、フェンシングをやり込んでいるとはいえ直ぐ

さま実行出来ることに驚きを通り越し呆れるほか無い、この世界でも驚異的なのだろうメイとコナは呆気にとられ、マリアは目を輝かせていた。

「あ、ああ、手加減無しで放つたからだ」

正氣を取り戻したコナは説明を続ける。

「魔技術はこれ以外にも色々とあるが一つ扱えるまでが苦労する。だから基本一人一つなのが多いな」

「魔力を感じる」ことは出来るなら、魔術と技は同時に使えないのか？」

レイピアを手で遊ばせながら勇は疑問を口にする。

「はい、体内の魔力を感じるのは同じですが、それをどう操るかはまったく違うのです。頭で理解し法則を覚える、それらを書物などから学んでいく方法が魔術、魔力を込められるまで一つの動作を体になじむまで行いうのが魔技術です」

マリアが熱のこもった声で答えながら、潤んだ瞳の視線が実行した勇に注がれている。

「魔術が理論などの学術的なものに対し、魔技術は体に覚えさせる武術的なものといったところか？」

「そう……そして魔術は詠唱する分発動が遅い……けど遠くまで届く……魔技術は直接発動するから……素早く打ち出せる……でも射程が短い……」

「一長一短がしっかりとあるんだな」

メイの補足を聞き、世の中上手く出来ているよなと晶は頷きながら感心するのだった。

「そつだな、だから魔術師が一方的だったりはしないし、逆に騎士達が優位と言うわけではない、お互いに協力し合つことが大事だな」

ユナが指を立て晶の意見に同意するように頷いていた。

「フ……根本的な魔力が認識できない自分は役立たず……足手まといは避けたいな……」

晶落ちする晶は気持ちを和ませるため、足元を通りかかった茶色い少女をなでくつまわすのだった。

「勇者様と晶さんは一矢仇を貰つてやる」

元々一泊させらるつもりだったのだから出発は明日となつた。

晶と勇が通された部屋は豪華な作りになつており、金、銀、そして宝石が散りばめられているが派手さは無く、意匠は必要最低限に留められている。

椅子やベッドは上質な物を使用しているのが晶は感触で分かった。

「私は隣の部屋にいますので、何かご入用でしたら遠慮なく言つてください」

失礼しますと笑顔を勇にだけ向けてマリアは退出した。

「やつと落ち着けたような気がするな」

勇がベッドに横になりながら言つ、その意見に同意しながら晶は椅子に腰掛一息ついていた。

「まあ、召喚されてから謁見、選定、そして模擬戦と立て続けだつたからな」

感じている以上に疲労が大きかつたらしく、ため息と共に漏らす晶だった。

「本当に現実なんだよな

夢物語のような現象だからだろう、ベッドで横になつている勇は天井へ手を伸ばし、握つたり開いたりして夢ではない事を確認していくようだった。

「かなり非現実的だけど、痛みはもとより五感がしつかりあるからな

晶も椅子に座り、自身の掌を見ながら同意する。

「実は感覚もある夢で、一旦寝たら何事も無く元の世界に戻つてい

たりしてな

笑う勇だつたが本当は「これが現実だと認めているのを、晶は言葉から感じ取っていた。

「と、うか俺たち普通に戻れるって思つてゐるが、本当に戻れるのか？」

「確かにそうだな……念のため聞いてくる」

マリアにその辺りを聞くと椅子から立ち上がり、晶は部屋から出ていった。

「たしか隣の部屋だつたな

晶達が通された部屋は角にであつた、そのため隣は一つしかなく其処へ向かい扉を軽く叩く。

「マリアさん、少しいいか？」

暫く待つが全く返事が無い、首をかしげる晶は再度強めに叩く、しかしそれでも何も反応が無かつた。

「マコアさん？」

失礼と思いつつも晶はドアノブに手をかけると何の抵抗も無くすんなりと扉が開く、鍵は掛かっていなかつたのだ。

晶はそつと覗き込むとその部屋は明かり一つ灯つておらず、暗闇に閉ざされていたため訝しげに思いながらも目を凝らす。

「……」

廊下から光が差し越す部屋を覗らし出し、晶は見に入ってきた状況に何とも言えず沈黙するほか無かつた。

真っ暗な部屋の中マリアは居たがその姿が異様なのである。

ベッドに正座し、壁に向かい微動すらせぬ凝視していたのだ、しかも向いていいる方向は先ほど晶が居た部屋である。

晶はこままでに自身に向けられた暗い瞳を思い出し、寒気に身を振るわせる。

「見なかつたこと元しそう」

触らぬ神に祟り無しと静かに扉を閉め、晶は部屋に戻った。

「どうだつた?」

「あー、今は居ないみたいだつた」

晶は室内を見たことを無かつたとするため、ドアを叩いたが反応が無かつたと説明する。

「やつなのか? 隣にいるつて言つていたよな?」

口にしながら勇はわかつと部屋を出て行き、その後ろを晶はついて行く、晶は今までマリアの態度から勇が相手なら出てくるのでは? と後ろを歩きながら少し期待をしていた。

「マコア、居るか？」

マコアがいる部屋の扉を勇は呑べ。

「ハイ、どうしました？」

扉に張り付いていたと晶が勘ぐるほどに顔を出すマリアの対応は早かつた、振り返る勇は居るじゃないかと言いたげだったが晶は当然無視する、正直なところ勇だから出でたと言ったかったのだ。

「少し聞きたいんだけど、俺達って元の世界に戻れるよな？」

「えー？」

勇の質問がかなり衝撃を受けたようだ、マコアの顔から一気に血の気が引いていく。

「この世界を……わ、私を……捨てるの……ですか？」

「うおー、ちよ、ちよつと待てー、泣かないでくれ

身体を震わして涙目になるマコアに勇はあわてる。

「安心しきつてー、ややんと魔王を倒すから、なー」

勇はなんとか慰めて聞き出している様子を晶は見ながら疑問が浮かぶ。

(マコアさんの態度は何かやばいな……いつ……病んでこない

な……だとしたら勇の修羅場で出血だたー!?)

晶から見ても物凄く言いたくないといった感じであり、戻れると口にだした時も俯いた状態でボソボソと辛うじて聞こえるよつな声であった。

勇の後ろから見ていたので俯いた時、あの暗い瞳になつていたのが晶には見えたのである。

「なるほど、色々と手順が必要なうえ魔力も大量にいるのか……おいそれと使つ訳にはいかないのか……ありがとうな」

「……」

マコアが俯きながらうつじて頷き、勇が扉を閉めるまで顔を上げる」とは無かった。

「なあ勇、マリアさんとはじつてあんな病んでいるんだうつな?」

マリアに聞かれたくないため、泊まる部屋の前で話しかける。

「病んでる? なんの事だ?」

お互に言つていて「」と一瞬理解できず黙り込んだ。

「あんな勇、マリアさんとの態度、分かっているよな?」

訝しそう晶は確認をとつてみるが相変わらず勇は首を傾げただけである。

「本当に分からぬのか？　お前が勇者をやると決めた時のマリアさんだぞ！」

「決めた時……わからんな」

「この時晶は勇の様子が変だと気が付き、よく観察すると田の焦点が合つておらず、虚空を見つめへラへラと笑つてこる。

「勇！　田を覚ませ！」

晶は襟元を掴み全力で揺さぶる、それがいつをやつしたのか勇の瞳に生気が戻つてきた。

「あれ？　何の話ししていたつけ？」

「余程怖かつたんだな……何でもない、何でもないんだ……」

肩を叩き慰める晶はホロリと涙を拭つのだつた。

部屋に戻つた二人は明日から大変だつと、早々に寝ることにしたが、新たな問題が発生していった。

「どうする？」

勇が悩みながらあるものを見ていた、同じく晶も注視する、そこには部屋の中にあるたつた一つのベッドである。

元々一人しか召喚されないはずであったからだらう、ゆえに部屋は一人用である。

勇者が就寝する部屋なのでかなり上質で広いが、家具は一つしかなく一人が泊まるようにはできていない。

「同衾なんぞ考えただけでもおぞましいな

「やめてくれよ……」

それなりに大きなベッドであったが、掛け布団及び枕は勿論一つである。

晶は勇と一緒に寝ている姿を想像し、あまりの光景に身を振るわせた、その姿はまさに同性愛者そのものであり、同じ想像したのか勇も顔を顰める。

「とにかく！ 一人はそつちに寝ることになるな！」

想像を吹き飛ばすためだらう、気合と共に荒げる勇が指差す物を晶が見ると、そこには2人掛けの椅子があつた。

椅子としては大きめだが、元から寝るためのものではない、寝返りを打つとあつさり椅子から落ちたりとかなり寝苦しいことが想像できる。

そのとき晶に電撃が走るかの「じく」が浮かび上がった。

勇を氣絶させて自分がベッドを占領すれば、心地よい眠りが約束されるのでは？ 真正面からやれば当然負けるが不意を突けば勝つこともあるかもしれない、晶はそう考えた。

勇に気付かれる前に迅速に行動するため、殴れる手近なもの求め、

素早く室内に視線を回した瞬間、とんでもない物が視界に入る。

「ああ……おまえ……」

そこには宝玉を開放した完全武装の勇がいた。

「なに、気絶するのも寝るのも同じようなものや」

「貴様！」

「お前だつて同じ事考えただろつ！」

ドタバタと音が鳴つていたが暫く後には静かになり、部屋の明かりが消えるのであつた。

王都トキは小高い丘の上に作られた街である。

丘の頂点に王城を建設、その周囲に貴族達の豪邸が立ち並び、さらに周辺には一般市民の住宅が立ち並んでいる。

丘に沿つて都市が形成されており、そのため平地が殆ど無い、大きな通りは緩やかな坂になつていて、道は基本的に階段が張り巡らされていた。

「これまた複雑に入り組んでいるな

王城を出て貴族が住む高級住宅街を抜けた晶は、面倒くさいと後

ろを振り返った。

豪邸が立ち並ぶ地区は多少大きめに道が整備されているが、それでも何度も折れ曲がり複数の道が交わる交差路を通りてきたのである。

迷わないよう先行していたコナとメイの後ろを歩き、やつと一般住宅街へ入り一息ついたところである。

ちなみに晶達の服装は詰襟の学生服ではない、流石にあの詰襟学生服は目立つすぎるのだ、一人が目を覚ました時にマリアが服を持つてきたのである。

晶には厚手の生地を使用した質素で地味であり、頑丈さを求めたこの世界の一般人が着る茶色っぽい服であつたが、勇はかなり良い素材ゆえだろう、薄手ながらも丈夫さと動きやすさを兼ね備え、小さな装飾が僅かに入っている白を基本にした一点ものと思わせる高級な衣服であった。

普通なら服装の差に不快感を示すものだが、目立たたくない晶には地味である方が都合がいいため特に不満はない。

「此処まで降りてくるまでマリア達の案内が無かつたら、盛大に迷つていただろうな」

同じく後ろを振り返りながら歩く勇と同意見の晶は道順をなんとか思い出していたが、細かい所が思い浮かばず途中であきらめた。

慣れれば迷わないかもしないが、まだ来たばかりの場所なうえにこれといった目印も無いのだ、一発で覚えるのは無理な話だろう。

「攻め込まれた時はこの複雑な路地が敵の進行を遅らせるからな、これも防衛のためだ」

晶が前へと視線を案内のためにユナが先頭を歩きながら説明する姿は、親が子供言い聞かせるような口ぶりだった、一人が年相応の子供っぽさを見た所為か優しい視線で微笑んでいた。

「勇者様、危ないですよ」

最後尾にいたマリアが注意を促す、その声が聞こえた瞬間に小さく悲鳴があがつた。

晶が見ると其処にはバランスを崩した女性の姿であった、余所見をしていた勇が女性とぶつかつたのだろう。

女性が抱きかかえていた雑貨が散らばり階段を転がり落ち、晶の足元にも転がつたのでとっさに足で止めたあと拾い上げる。

晶は女性は大丈夫かと一瞥すると勇が手を伸ばし抱きとめていたため女性は無傷のようだった。

「すまん、大丈夫か?」

よそ見をして女性を危険に晒したのだ、勇の声は申し訳ない気持ちで一杯であった。

「あらあら、ありがとうございます」

雑貨を拾い集めながら晶は階段を上り勇達を見ると、抱きかかえ

られた女性は現状を時間が掛かつたのか少し呆然としたあとやや遅れて礼を述べ、頬に手をあて柔らかな笑みを浮かべていた。

その人はマリア達に負けず劣らず美人であった。

二十代後半ぐらいで大人びており、深緑は真っ直ぐに足元まで伸びている、髪と同じ色の瞳で柔らかな笑みを浮かべている姿は、あらあらうふふ、と全て済ました。

一般市民なのだろう、厚めの茶色を基調とした生地のワンピースに腰辺りに細い簡素なベルトをしている。

煌びやかさよりも丈夫さに重点を置いた質素な服装を着ているが、服に包まれた体はとても魅力的であった、女性達三人が自身の体と見比べて悔しげになるほどである。

「ところで……勇者様」

「ど、どうした?」

マリアが勇に近づき声をかけるがその声は酷く暗い。

睨まれているのだろう、勇が緊張しているのが晶にはとてもよく分かった。

「いつまで抱きしめているのです?」

言葉が脳に達したのか勇は抱えている状況に気が付き素早く離れ、恥ずかしげに頭を搔きながらすまんと一言あやまるが女性は気にしないのか相変わらず微笑んでいるだけである。

「すいません、無事なものがこれぐらいしか残らなかつた」

運悪く落ちたものが殆ど丸い果物や根野菜といったものだったの  
で、晶達は雑貨を少量しか拾えないでいた。

不運なことに長々と続く階段を転がり落ち、無事だつたものは急  
いで止めたものや細長い物しかなかつたのである。

「まあ、困つたわね？」

本当に困つているのだろうかと晶が疑問に思つぼどに、女性はか  
わらず微笑みを浮かべているのだった。

「なら俺達と一緒に買い集めるか？ もうろん費用は俺達が出す」

「私達に非があるからな、当然だひつ」

勇の意見にユナは同意し、晶も特に反対する理由も無かつた。

「いつも余所見していたし、申し訳ないわよ」

「気にするなつて、お詫びだから」

自然に行つのかはたまた狙つてゐるのか、遠慮する女性に笑顔を  
振りまきながら勇は手を差し伸べる。

「ふふ、じゃあお願ひしようかしら」

女性はにこやかに笑いながら優しく手を重ねた。

「お嬢様、お名前を窺つてよろしいかな?」

「あら？ 名前を聞くときは先に名乗るのが礼儀じゃないかしら」「これは失礼、私は日乃下勇です、勇とあよび下さい、以後お見知りおきを」

「私はマー・ガレット、マー・ガレット・デイ・シーです、よろしく」

ପାତା ୧୫୩

二人は互いに紳士淑女な芝居がかつたやり取りをするが、演じる人物は美男美女である、行う様子は非常にきまつっていた。

「そういえばどれ位資金があるんだ？」

「そ、う、だ、な、」國庫並みが？

金額を思い出しているのかユナが顎に手を当てて首をかしげ、途轍もない返答に一瞬何を言われたのか晶と勇は視線をあわせる。

「国王が…………要求すれば…………いくらでも出す…………」

「本当に！？」

メイのとんでもない答えに晶と勇は目を見開く。

「はい、本当です。現在所持している金額で足りなければ此方で用意すると王様が言わされました。このように渡された金額も多いです」

マリアは小さな袋を懐から取り出していた。

見た目は小さいが入っている金額は、かなりのものであろうと晶は想像するほか無かつた。

「現状は思ったよりも切羽詰っているみたいだな」

「ああ、ゲームとかだと、大概国王からもらったものと言えば非金属製の武器と防具、それと安い傷薬数個買つたらスッカラカンな資金だけだからな」

向かい合つて現状を再度認識する一人であった。

都市に入る城門の前に広がる大きな通りは非常に賑やかで、左右に足り並ぶ露店から威勢のいい呼び声が響き、小さな子供が元気に走り回り、親子が仲良く散歩している活気溢れた場所である。

「へへ、違う町から来ていたのか」

「ええ、ちょっとした用事でこの王都にきたのよ。もう終わつたけどね、後は帰る準備しているところだつたんだけど……」

「その時にぶつかったのか」

勇とマーガレットは和気藹々と話をしながら品物を物色している

姿は、晶から見てもなかなか良い雰囲気である。

「勇者様！ 無駄話はしないでさつさと終わらせましょう。」

「おっと、引っ張るなって」

不機嫌なマリアが強引に勇の腕を抱えて引っ張り、マークガレットから引き離していく、強く引かれて体勢を崩した勇は躊躇ながらも後ろを着いて行くが困惑しており、マリアの機嫌が悪くなつた原因は分かっていないのだろう。

「マークガレットさん、勇のこと気に入りました？」

「ふふ、さうね、彼カッコイイし優しいわ、嫌いではないわよ」

仲良く買い物していたマークガレットが勇に気があるのか晶は探しをいれる。

惚れたのなら勇のハーレムに入れて楽しもつと画策していたのだが、残念ながらマークガレットの表情が笑顔だけなので判断が難しい。

「私に興味があるのかしら？」

「まったく無いとはいいませんよ」

今後の勇との関係がね、晶は心の中で付け加える。

「さて、マリアさんが引っ張つてきましたが、マークガレットさんが買うものが分からないでしょ？」

表情から読み取ろうと観察するが、これ以上は探れないと晶は諦めた。

「どこかで会うか、はたまたこのまま会わざじまいが分からなかつたが、これだけの美人である、覚えて置いておいたと保留する。

「マリーアー、何処行くつもりだーー？」

「どこでもいいですー！」

ユナの呼びかけるが、その場に勇を出すせたゞ無のだろう、マリアは強く反発する。

「ちよつと待て、流石にそれは失礼すぎるがーー。」

あまりの態度に勇も顔をしかめ注意する。

「いーいめんなーーそこーー！」

勇に叱られた事がよほじ堪えたのだろう、この世の終わりだと言わんばかりに真っ青になつていた。

「メイさん、彼女のあの異常な姿はどういう事かわかる？？」

「それは……」

晶は前から気になつていた事を質問するが、メイの態度から軽々しく答られ無いと理解できた。

「ふむ……今回はここと、まだ出会つて間もないからな

「ありがとう」

メイと話をしている間に勇が慰めたのか、マリアの顔色も幾分戻つたため晶は一つ提案する

「資金が豊富にあるといつても何が有るか分からなからな、節約していこうか」

「あくまで軍資金……個人の買い物には……そういう使えない……王に資金を送つても、遠くに行けば届くまでに時間がかかるものである。

手元にある資金が大いに越したことはないので、晶の意見にメイも頷いていた。

「旅の準備だけど、なにぶん始めてだからな……何を買つてよいのやら」

マタギの技術に野宿の仕方も教わっていたが、異世界という特殊な場所なうえ、当然魔物も多くいる危険地帯である。

野性動物に襲われ難い前の世界での山の中と同じ感覚でいくと、危険と判断するのは当然であった。

「実は一通りの物はそろえて門の詰め所に用意してあるが、晶殿の分が足りなくてな、その分を買い足さないといけない」

「"めんなさい」

コナの指摘に節約と言つたてまえ自分自身が負担かけているのだ、  
晶は申し訳なく謝るしかなかつた。

「どうもあつがどういぢれこました」

頭を下げるマーガレットの両手には荷物が抱えられており、色々と歩き回つ全て買い終えていた。

「ひつちが悪かつたからな、本当にすまなかつた」

勇も頭を下げる。その後晶達は軽く手を振り歩いてこべマーガレットを見送つた。

「名残惜しいか？」

晶は勇の隣に立ち話す。

「そんなこと無こや」

「本当にですか？」

勇の答えに疑いの眼差しを向けるマコアである。

晶は勇が嘘をついてると見抜いていた、ムツツリスケベの勇が

あのマーガレットの魅力的な身体に、興味を抱かないわけがないと晶は確信していたのだ。

「本当だつて、それよりも俺たちも行こりやせー。」

「そうだな

そんなことを微塵も感じさせず勇は先へ進もうと促す、女性の目の前では紳士に振舞う勇が正直に言つわけがないと追及はせず晶は同意する。

「ああ、こりちだ」

ユナが先導を切り門を潜ると、眼前には一見のどかな草原が広がつていて見えたが、見えないだけで少し進めば魔物が跳梁跋扈する魔窟であろう、危険だが魔王を討ち取るために行かねばならない、こりして勇者一向の旅が始まったのだった。

砂漠特有の水分を飛ばす高温のなか、人間と同等の巨体をもつたサソリ型の魔物が鋏を勇へ振るつ、愚直なまでに単純な攻撃だがなかなか速度があつた。

元から有る運動神経を使い、素早くかつ最小限で避け、一足飛びで間合いを詰めよう。

太陽光を反射するレイピアが深々とサソリ型の頭部へ突き刺さつた。

昆虫ながら連携という頭脳があつたのか、はたまた偶然かは理解できなかつたが攻撃の体勢から戻つていない勇の背中目掛け、別のサソリ型が特有の毒針を持つ尾で襲い掛かる、しかしながらその一撃が届くことは無く空へ舞つた。

「させるか！」

ユナがバスターード・ソードで切り落としたのだ、甲高い奇声を上げながらサソリ型がユナへ反撃する、しかしそれが魔物の致命傷となつた。

重いものを叩きつけた鈍い音が響く、一瞬停止するサソリ型の上には輝く白い鎧姿の勇がいた。

レイピアの先端を真下に向け一気に振り下ろす、体重が乗つていたのだろう、頑丈そうなサソリ型の外皮を突き抜ける、奇声を上げ振り落とすかのように身体をねじるが瞬く間に動きが止まり、力な

く地面に伏すのだった。

晶の視界に数人の青い少女が冷氣と共に流れてきた、視線を向けると砂漠という場所にはそぐわない氷の彫像が乱立している。

ペたペたと青い少女が触っている分厚い氷の中には、先ほど勇達と戦っていたサソリ形もいれば周囲に溶け込むような黄色い猪も閉じ込められている。

微動すらしないのは既に命の灯火が消えたのかはたまた動けないだけなのか、晶には判断はできなかつた。

「相変わらず魔術はすごいな」

「当然……」

勇から賞賛され、メイは小さくピースサインを向けていた。

砂漠に凍土の世界を作つたのはメイであつた、彼女いわく砂漠に出現する魔物は水属性の魔術に弱いということだつた。

それを証明するかのように氷の塊はメイが放つたのはたつた一発の魔術である。

「皆様大丈夫ですか？」

勇達の安否を気遣うマリアだつたが、戦いぶりを見て傷は少ないと思ったのだろう、さほど心配している様子は無かつた。

晶から見ても先ほどの戦闘は余裕を持って対処しているのが分か

つたのだ、心配するだけ無駄である。」

「俺達大丈夫だ、晶は？」

「大丈夫だ」

「うおー、そんなところに居たのか？」

「いや、そんなところへ、一步も動いていないからな」

勇が周囲を見回すほどに存在感の無い晶は戦闘のときいつもしていたかといふと、実は殆ど動かず黙つて立つていただけである。

当然此処へくるまでに何度も魔物に襲われており、晶も最初は真っ先に襲われていたが、一度野宿しているときに魔物の奇襲を受けた。

闇夜にまぎれることが得意魔物であつたため見張りの隙を突かれいつの間にか接近されたが、最初に襲われるはずの晶は無傷であった。

「しかしながらここまで気づかれないのか分からぬ」

「なんとなく予想はつくぞ」

神妙な顔つきなコナだつたが晶の予想外の返答に感心し続きを促す。

「影の薄さ、存在感の無さといつもあるだろ？、しかし一番の理由は勇だ」

「俺？」

「そうだ、勇の近くに居るとかなり意識が勇に集中する、こと戦闘の場合だとそれが顕著になるな、存在感ありまくりでかなり強いんだ、当然だろ？」

本能に従つて行動し、弱肉強食の世界なら弱いものから襲つていはずだが、隠れる場所の無い砂漠でさえジッとしていれば見向きもされなかつた。

非戦闘員という自覚があり、節約のために様々な鍋や水筒などの旅の道具を背負い、目立ちそうにも拘らず素通りされるのだ、運搬用につれている駱駝には襲うのだから気づかれていないのが明白である。

「それだけ感知されないなら、暗殺行為が出来そうだがどうだ？」  
「残念だけど無理だな……こっちから行動を起こせば気付かれる可能性が高い」

勇の意見に晶は首を振る、動かないでいれば背景に溶け込みやすいが、動けばそれなりに目立つからだと晶は実験から分析していた、その上に殺すという動作では殺氣も混じつてより気づかれやすくなると予測できていた。

ちなみに実験とは一時期どこまで気づかれないか試したことがあつたのだ、気配に敏感な人物　その人物は勇なのだが　に擦り寄つたり、背後からそつと近づいたりそのまま動かずに隙を窺つたことがある。

「お、お前まさか…」

その説明をすると何かを思い出したように勇が唐突に声を上げた、ありえないと言いたげに目を見開き、身体を震わせながら晶を指差している。

その答えとして晶は親指を立て、輝かしい笑顔を向け肯定した、勇と一緒に居る時にそのその辺にたむろしている不良っぽい人物に石を投げつけ、喧嘩をおこさせていたのだ。

「やたら絡まれやすい時期があつたけど、お前のせいいかよこのやうう…」

「まあまあ落ち着けって、そのおかげでかなり魅惑な体つきの美人と知り合えたからトントンだろ?」

「ぐ… それは…」

晶の答えに押し黙る勇であった。

「それにしても役立たずですね」

「ぐふう」

勇を実験対象にしたせいか冷徹なマリアの辛辣な言葉に思わず晶は胸を押さえる、事実だけに言い返せなかつた。

「だから言つていいだろ?、もつと鍛えひー。」

「これでも頑張っているのだけれど……」

ユナが一喝するが晶は恨みがましく口にする、実は逃げ惑つて いた晶に見かねユナが少しでも使えるように、ナイフの戦い方を教えたのだ。

残念なことにまったく接近戦の才能が無く、いくら頑張つても精々無防備な状態の相手に一太刀入れる程度である。

「はあ……『矢さえあればな……』

嘯く晶にもマタギの技術があり、獲物を仕留めるすべはある、しかし基本猟銃の狙撃であった。

運悪く魔術が発達し多くの人が使用できるこの世界では遠距離戦は基本魔術で行われる、故に弓矢の発達が遅く、有つたとしても太目の枝に紐を括りつけた粗悪なもの、とても使えるとは思えず唯一猟銃に近いクロスボウも当然無かつた。

「しかし流石砂漠だな、暑すぎる」

力なく口にする晶は砂漠の熱気に大分やられていた、砂漠に入るまえに光を遮る白い布を購入し、全員頭からかぶつていたが、現状では仕方あるまい。

日がそれなりに下がっているが、砂漠のど真ん中である。

見渡す限りの砂と容赦なく照りつける太陽、焼き殺されそうな気温、幸いなのは湿度が殆ど無いことであるうか。

「がんばれ……」

「メイちゃん…… ありがと……」

メイもマリアも普段に比べ大分元気が無かつたがまだまだ歩けるようであつた、魔術師と神官とはいえ従軍するための体力があるのだろう、コナはほとんど疲れをさせておらず、戦闘もこなしながらその程度とは流石騎士といふことだろう、歩く姿もいまだぎびきびしている。

「晶、もっとしっかりとしろよ」

「お前は化け物かよ……」

そんな中コナと同等の疲れしか見せていないのが勇であつた、元々フェンシングをやつていて体力が高かつたというのもあるだろう、それでも騎士といふ常日頃から鍛えているコナと同等とはどうこうことか？ 勇の完璧ぶりにあきれ果てるばかりの晶であつた。

「見えたぞ！」

太陽が地平線に隠れそうになるほど歩き続けたときコナの声が上がる、晶は顔を上げると少し先を先行していたコナが前方を指差してた、まだ大分先ではあるが茶色い川が流れており、周囲には草や木が生えているのが見受けられる。

「蜃氣楼だつたら最悪だよな」

勇がとんでもない一言を発する、その瞬間晶はやめてくれと言いたげに勇を見据える、なまじ冗談ではない可能性があるのが悲しい

といひであった。

見つけてから数時間あるひてようやく町へと到着し、その瞬間全員が安堵のため息を吐いていた。

日が沈み幾分涼しくなった町に人が多く歩いていたが、かなり体力を消耗していたため判断が鈍ると情報収集は翌日からとなつた。

女子と男子に別れ寝床を一部屋頼み各自部屋へ移動する、限界にきていた晶は即行でベッドへ倒れこみ睡魔へと誘われるのだった。

しばらくのあと喉の渴きを覚えた晶は大分疲れがとれた身体を起こし、水を貰いに一階の入り口のカウンターに向かう、夜の萱が落ち、蠅燭の明かりで揺らめくなかに先客が居た。

「勇と……コナさん？」

片手には水が入った木製のコップを掲げ仲良く隣あつて座つていた、晶は新たな展開かと目を輝かせながら物陰に隠れつつ移動を開始する。

蠅燭のみの明かりのためカウンターのみ明るく、周囲の闇に紛れながら聞こえてなおかつ明かりが当たらない椅子に座る、来たばかりのようで勇は伝承などを店主に話を聞いているところであった。

勇が最近聞いた噂や御伽噺なども聞きだしていたためコナは首を

かしげる、伝承などなら分かるがなぜ最近ことである噂まで聞くのか疑問であった。

「噂も聞くのか？」

「もしかしてこれを取つた時に反応して入り口が出現とか、そんな仕掛けがあるかも知れないからな」

勇が懐から出した宝玉を取り出すのを見ながらユナも検討がつく、宝玉の周囲には勇者選定のような魔術が掛けられていたのだ、同様になにかしら封印の場所にも仕掛けがあると考えたのである。

「ガキのこりに聞いた話しからしつかりと覚えている訳ではないが……」

勇の言葉に促され、店主がポツポツと思い出しながら喋りだした。

要約すると、砂漠で迷つた青年が砂嵐に巻き込まれ、それでも突き進むと突然見知らぬ建造物が出現、そこで砂嵐が収まるのを待つていると、奇妙な人影が現れ出て行けといわれる、不気味思つた青年は素直にしたがつてい砂嵐の中を歩くのか思つたが、不思議と止んでおり無事に村へと戻るという話であった。

「それぐらいしか知らないな、年寄りとかの方が詳しく知つていてると思うぞ、大概川の近くで涼んでいるな」

少し禿げ上がつた頭と、暑い地域特有の褐色肌を伝う汗を拭いて座りなおした。

「此処に泊まつた人とか街の人から聞いた噂はなにがある?」

「噂か……」

勇が尋ねると店主は首をかしげる、しばし考えたあと何か思い出したのかポンと手を打つた。

「わつわえば最近黒い牙とかいつ盗賊団が出始めたらしいな

「盗賊か」

王国に仕える騎士のコナは守るべき民が魔物と同様に、襲つているといつに思わず眉をひそめる。

「そんなものは残念なことにござりでもいるが？」

魔物が跳梁跋扈するこの世界でも、やはり人を襲つ盗賊といつた輩は多く居る、盗賊団が出るなどなんら不思議なことではなく、噂になるほどでもないのだつ。

「それがな、少し特殊なやつでオキ砂漠限定で名が広つてゐるんだ、しかもそのなかに幽霊がいるんだとさ。なんでも戦闘中いつの間にか近くにいるといつた具合でな、行き成り集団で襲いかかってきて暴れるのはそちらの盗賊と同じだが、逃げ出そうとした者の傍に、気が付いた時には見知らぬ人間に首を切り裂かれるんだとさ」

噂が広がるといつとは、襲われながらも生き残つた者がいたのか、生かして返したのだろう、もしそうならばその理由は一体何かとコナの頭に疑問が次々と浮かびあがる。

盗賊行為を行つなら余り有名になるのはまずいだろう、例えばこ

の道に凶悪な盗賊団がいるとなると誰も通らなく、そのうえ通つたとしても優秀な護衛を付けるだろ、下手すると討伐隊が結成される可能性が高くなる。

それなら密かに活動した方が利点が多い、皆殺しにしておけば噂になる速度もおそくなり、場合によつては魔物がやつたとされるだろ、もちろん死体を検分し傷跡などからどちらがやつたかわかることが多い

「ありがとう」

「いひちこそ礼をいいたいセ、いひこ最近客が少なくてな、こいやつて話をするのも久しぶりさ、といひで」

勇が礼を言いユナは口を潤すために水を含む、瞬間店主の顔が二タリとするのが分かつた。

「そちらのお嬢さんが本命かい？ 他に客が居ないからつてあまり激しくせんしてくれよ」

瞬間驚きで水が気管に入りユナが咳き込んだが、勇は平然としたままであつた。

「本命つてそんなわけ無いだろ、たしかに美人で凛とした輝きをもつた女性だけど俺がつりあうはず無いよ」

「勇殿！ 何を言つているのだ！？」

真っ赤になつて立ち上がるユナは褒められなれないため羞恥心からか体を振るわせていたが、どこと無く嬉しさも感じていた。

「何つて、思ったことを言つてるだけだ、特に変なことは言つてないだろ?」

自然体で口にする勇は本気で言つてるのがユナにも分かり、怒るわけにもいかず、また言い返せることも無く真っ赤になりながらおとなしく席に座る。

「つりあわないつてお前さんも結構な上物じゃないか」

「いやいや氣のせいだろ、ユナは髪も肌も綺麗だし、背筋も伸ばして威風堂々としていて威厳があつてカッコイイ、でも時々みせる女性らしいちょっとした仕草とかが魅力的だろ」

女性ながら騎士になつた故かきつい印象を与えるためか、もしかした両方かもしれないがほとんど男は寄り付かず、また近くにいた男性も堅物なものが多かつた、そのため女性として褒められることに慣れていないユナは終始真つ赤に染まりながら水を口にすることができず、下を向いているのだった。

朝になり全員で近くの食堂で朝食を済ますため外に出た晶は昨夜は良いものが見れたと感慨ぶかげに周囲を見渡す、砂漠にある町だつたが木もそれなりに生えており、草も膝ぐらいまで伸びている、もちろん熱帯雨林のように茂っている訳ではない。

ユナの説明によると砂漠が直ぐ近くに広がっているが此処は川も

流れており、意外と地下水とかもあるそうだコナの説明に納得しつつ再度周囲を窺う、暑い地域ゆえに褐色の人が多く、主に暑さ対策なのだろう白い服を着ている。

伝統衣装なのか、男性は腰に一枚布を巻き、女性は元の世界でいうサリーと似た形の服をまとっている姿が多い、まだ朝早いが気温が上がる前に活動しようつとこうことなのだろう、人によつては既に働き出していた。

「実は昨日、宿屋の店主に聞いた御伽噺がある、結構それっぽいからな、後念のため噂も何かヒントになるかもしれないから、皆も聞いてくれ」

勇が話を皆に聞かせる、晶は知つていたが盗み聞きしていたことは秘密である。

「奇妙な人物はもしかしたら……鎧を着た勇者……？ そう考えると砂嵐のなかに何か建造物がある……？」

「その可能性は高いな」

メイの推測に晶は同意する。

「まだ他にも聞いてみないと分かりませんよ」

「そうだな、まだ情報が足りないからその話だけで決めるのは早計とこうものだ」

マリアとコナは一人に忠告する、かなりそれっぽいが一つの話で決めるのはまだ情報が足りない。

まだまだ話は聞けるだらうといつことで解散し、昼頃に又いの食堂で集合といつことになつた。

「さて何か面白い話があつたか？」

食堂に集まり各自好き勝手に座る、昼といつ時間帯だから賑わつてあり、日が高く熱い時間帯だけに直射日光があたる道には殆ど人が居ない。

「色々聞いた……でも一番それらしいのが……店主から聞いた話だつた……」

「そうだな、噂の方も黒い牙ぐらいだつたな」

マリアの意見にコナは同意するよつて領先們達も同じ反応であつた。

「当て推量で砂漠を歩き回るのは自殺行為だろ？」

勇がどうすると言ふと命める、それとともに晶がため息と共に丸テープルに突つ伏した、砂漠を渡つてきた時のことを考えてぐつたりしたのだ。

その時黒い少女が漂つているのを田で追つていると、何処かで見た人が席を探していた。

（あれつて……えーと……だれだっけ？）

頭をひねぐり回しなんとか思い出せうとするが思い出せない、晶

が上体を起し、記憶を呼び起しあつとして自然に女性を田で追つ。

「もしかして、マーガレットさん？」

同じく見ていたのか勇が席を立ち晶が見ていた女性に近づいていく。

振り返った人物の顔と勇の言葉から晶は思っていた、王都で会ったマーガレットで暑い場所だからだらう、半袖で膝辺りまでのスカートをはいている。

「あらあら、お久しぶりです」

マーガレット変わらず頬に手を当て笑顔である。

王都での事を思い出したのだろう、マリアの眉間に皺が寄る。

「久しぶりだな、いらっしゃれよ」

「マーガレットさんはいらっしゃりで良いですよねー」

勇も笑顔で答え隣の席に促すがマリアが強引に割り込み自分の隣に座らせた、勇から右回りにマリア、マーガレット、コナ、メイ、晶となつていて。

「勇さん達こんな所でどうしたかしら？」

マーガレットは相変わらず頬に手を当て微笑んでいた。

「いのあたりで伝承とかを聞いて回るといひだ

「伝承ね……」

勇の台詞にマーガレットは首をかしげる、その様子に何か知つているのかと全員が注視した。

「さうね、砂漠のどこか祭壇があるって聞いたことがあるわよ」

「本当か！？」

思わぬ情報だった、身を乗り出しユナは聞き返していた。

「えーと、なんだつたかしら？　たしか昔力が試される祭壇があつて今でも砂漠のどこかに眠つているという詩みたいなのを聞いたことがあつたわね」

「もう少し詳しく話せる？」

大きな情報だと感じたのだろう、勇が促しいわれるままにマーガレットが歌うかの様に話しあした。

「勇氣有る者、月に導かれ進むは砂の世界、砂と風に守られし祭壇、守りしものに挑み打ち勝つ者のみ大いなる力の靈を得るだろう、だつたかしら？」

マーガレットの詩は予想以上に有効な情報に晶は思えた、お年よりや色んな人が集まる食堂で聞いても宿屋の店主と似たような話しか聞けなかつたのだ、全員同じ思いだつたのだろう顔を突合せ相談し合つた。

勇気有る者は勇者、月に導かれ進むは砂の世界から月を田指して砂漠を突き進む、砂と風に守られし祭壇から砂嵐の中に祭壇があると予想がついた、そしてそれが最も納得いく結果になつた。

「よし、それで一旦進もう、月を田指すからやつぱり夜出発といつことか」

勇判断に晶は同意する、これ以上情報が得られない可能性が高く、足踏みしているよりは進んだほうがよいだろう。

「しかし月を田指して本当にたどり着くのか？」

「どうこういふことだ？」

勇が続きを促す。

「月も太陽と同じように移動するのだろう？ 東の地平線に顔を出した時から頭上を経て西に沈んでいく、ただ単に月のあるまゝに進めばいいのか？」

もつとも他に何かあるのかといえば晶には思ひ浮かばなかつた。

「さうかもしれない……でも勇者関連だから……月を田指していくば……たどり着く魔術が掛けられているかも……」

「さうですね、神殿の泉にも選定するような魔術がかかつていまし  
たから、その可能性は高いと思います」

メイの意見に同意するマリア、結果やはり月を田指して進む事になつた。

「そうだ、いい話聞かてくれたお礼に、此処の食事代おいろよ」

「あらあら、偶然知っていたってだけだから気にしなくていいわよ、それにこの前もお金を出しててくれたから、お礼なんていらないわ」

勇がお礼に奢りうとするがマーガレットは遠慮してこるようだつた。

お互いに譲らずお礼させてくださいとか、いえいえそんなとか言い合っている、その姿は晶から見てもまさにいたずつている様にしか見えない。

突然テーブルを叩きつけた音が響き渡る、一人の様子に嫉妬したのだろう、マリアが机を叩き立ち上がっていた、そしておもむろに声を張り上げた。

「借りを貸したといふことでこつか返せば良いじゃないですか！そつしましょう！」

余りの迫力に思わず頷く一人であつた、その一連を見てユナとメイは勇になにをやつしていると呆れた視線を送り、そしてやつぱりニヤニヤと勇の修羅場を楽しむ晶であつた。

マリアが一喝したあと料金を払ってマーガレットを見据える。

「明日は早いので… それでは…」

鼻息も荒く勇を強引に引っ張り出していく、まさか出て行くとは思わなかつた晶達は暫く呆気に取られていたが、すぐさまマーガレットに三人は頭を下げマリア達を追いかけるのだった。

晶達がマリアを追いかけて戻つた宿屋の一室では一風変わつた展開が発生していた。

「『めんなさこ』『めんなさこ』『めんなさこ』『めんなさこ』

「分かつた、分かつたつて！ だから頭を上げてくれ……」

幼児後退を起こしたように連呼するマリアに、勇が困り果てていゐるのだった。

「勇、何したんだ？」

マリアが酷く氣落ちしながら立ち上がるのを見届けて、晶は小声で話しかける。

「とくに何もしていなこた、部屋に戻つたとたんここんな状況に…

…」

勇もマリアを見ながら小声で返した。

「たぶんだが、部屋に戻った頃には冷静になつたんだが、前に勇に叱られたのを思い出したんだろうな」

女性の涙にはやはり弱いのは勇らしさことなので、田が潤み泣き出しそうなマリアの顔を見たのだろう、申し訳なさげに頭をなでて慰めていた。

「どうあえず、もう一度マーガレットさんと会って謝つてくれか

「いや、オレが行つて頭下げてくる、その間に今後の予定でも考えてくれ

出て行こうとする勇を押し留め、晶が変わりに出て行く、リーダーである勇とこの世界の住人である女性三人で行動を決めた方が有効だろう、そう晶は思つての行動だった。

食堂に着いた晶は店内を見回す、それほど時間も掛かつておらず直ぐ見つかると高を括つていた、しかしいくら探しても見つからない。

まだまだ人も多いので運悪く見つからなかと思いつ傍を歩くHプロン姿の店員に聞くことにした。

一聲かけるとやはり晶に気が付いていなかつたのだろう、悲鳴を上げてお盆を胸に抱える。

「あの辺りに座つていた、深緑の髪と同じ色の瞳をした色白の美人を見ませんでしたか？」

「いいえ、そのようなお客様は見ませんでしたが……」

店員が首を傾げるが一向に思い出す様子は無かつたため、晶は礼を述べて新たに別の店員に聞くが返答は同じである。

砂漠特有の褐色肌が多いなか色白なら立つはずだが、全く見つけることが出来なかつた。

「スマン、探したけど会えなかつた」

いくら捜しても見つからなかつた為晶は宿へ戻つていた。

「せうか、少し失礼だつたかな、今度会つことがあつたら謝つておうか、そういうえば明日の夜出発するぞ」

「明日か、わかつた」

此処にたどり着くまで消費した物にはすぐさま用意できない物もあり、前日に頼んでおくため明日となつたのである。

次の日一通り荷造りを終えた一行は夜に備えるために明るいうちに睡眠をとることになつた。

晶はベッドで横になるがこの暑さと開け放つた窓から入つてくる眩いほどの日光である、一向に眠くなる様子が無かつた。

ふと隣のベッドを見るがそこには勇は居ない、同じく眠れないのだろう、旅に何か思うところがあるのか神妙な顔をしながら、窓際で椅子に座り外を見ていた。

全く寝むけが来ないと晶も窓から外を見ると分厚い壁の建物は全て窓も扉も開け放っていた、日陰が僅かに涼しいのか外には人が居ないが建物内には意外と人が居るものである。

「何見ているんだ？」

晶が聞くと勇が顎で指す、その方角に顔を向けるが特に面白い物は晶には見えなかつた。

そのことに勇が気付いたのか口で説明し、晶は改めてその場所を見ると窓を開いて着替えをしている女性が見えた。

「何覗いてんだよ！」

晶が吼える、顔を引き締めて外を眺める姿は風景画の様な情景だつた、真剣な顔をしながら考え方から何か思うところがあるのかと思つたのだ、しかしやつていたのは単なる覗きである、叫ぶのも無理からぬことであった。

「だつて窓全快なんだぜ！　目が行くのは当然だろ！　晶だつて本当は見たいんだろ！」

「だからつて見んなよ！　それに覗きなんぞしたくないわ！」

晶が注意するが勇は全く気にせず、それどころか晶の肩に手を置き笑顔を浮かべている。

勇の態度に不振に思つたが次の瞬間に硬直した。

「俺が知らないと思つてゐるのか？　お前、褐色肌が好きなんだろ

？」

図星である。

「だったら……一緒に覗くひが、兄弟」

勇のスケベ心からの行動を見ている晶は半面教師で余りしたくは無かった、しかし晶だつて男である、思春期真っ只中である。

熟考し、やはりやめようと言おうとした瞬間にだらしない顔した勇に頭をつかまれ無理やり振り向かされる、そこには驚愕の映像があつた。

「「着替え終わってるーーー」」

月が地平線から顔を出した頃に一同は運搬用の駱駝を連れて宿を出発する、節約のために連れるのは一匹のみで晶が持てない分を乗せていた。

なにぶん晶は非戦闘員なうえ敵に発見されにくいのである、せめて自分の分は持てと言われたため背負い袋に詰め込んでいる。

砂漠では湿度が低い結果なのか、はたまた植物が少ないせいなのか不思議と冷え込む、昼間の暑さに比べたら幾分ましかもしれなかつた、そんな月夜を出発してから三夜ほどすでに回っていた。

「本当に目標に向かっているのか?」

「たしかにな、だが信じて進むしかないだろ?」

半ば呆れ顔の勇の意見に同感だつたのだろう、ユナは眉をひそめながら嗜めていた。

しかし勇がそう思つのも無理は無く、ずっと同じ風景が延々と続いているのである、しつかりと進んでいるか疑問に思つるのは仕方が無い。

丁度砂の山一つ越えた辺りで先頭を歩く勇が急に立ち止まる、どうかしたのかと晶が勇を見ると厳しい顔つきで片手を上げ、全員に停止を促していた。

非常事態と認識したユナが砂埃を上げることなく器用に勇の隣に移動し同じ方向を見る、勇が何かを指差しその場に伏せて相談を始めた、何事かと晶達も同じ位置までたどり着き、先ほど勇が指差していた方角に視線をやる。

深夜だつたが空気が清んでいるうえ、満月であるため結構遠くまで見渡せた、一瞬晶は砂嵐かと思ったがそれにしても小さい、砂嵐の高さは数百メートルに及ぶのである。

晶が目を凝らすと、それらは十数匹におよぶ駱駝の集団、いや、少々分かり難いが黒いマントを羽織っている人間が乗つていた、瞬間脳裏に浮かんだのは噂になっていた黒い牙であった。

「黒い牙ですか?」

「その可能性が高いな」

マリアも同じ答えにたどりついたのだろう、ため息をつく姿は面倒くさそうであった、同意するコナだつたが一団を睨む視線は汚物を見ているようであった。

「何でこんな時に、しかもあっちからくるんだ」

晶が悪態をつくのも無理からぬことである、集団は円を背に迫つてくるのだ、その上隠れる場所も無く回避は不可能だつた

確率はかなり低いが未だ確定したわけではない、単なる旅の集団という可能性があるため勇達は武器を抜かずに接近する。

その一団は一直線に勇達に接近し相対すると武器を手に取り駱駘から降りた、盗賊と確定した瞬間であった。

勇達は武器を抜き放ち身構える、晶は戦闘の邪魔にならないために、一団から見え難いよう勇達の後ろへ移動し離れる、もちろんゆつくりと派手な動きをせず、ばれないよう細心の注意を払いながらである。

「勇者達だな」

先頭にいた大男が威圧しながら口を開いた、彫りの深い顔にはもみ上げから口周りまでしっかりと生えた鬚、髪も鬚も癖が強いのか縮れているため、男らしいというより何だか汚らしい印象を受ける、そんな厳つい大男が断定する口ぶりから狙っていたことが窺えた。

「違うな、そういうお前達は黒い牙とお見受けするが？」

無駄な戦闘を避けたいのだろう、勇は臨戦態勢で探りを入れる。

「ふん、勇者」一行に知られているとは光榮だな、しかし嘘をついても無駄だ、聞いていた通りだからな」

確信があるのでだろう鼻で笑い馬鹿にする口調であった。

（聞いていた通り？ 誰かに雇われているのか？）

晶は大男の言葉から予測を立てていた、祭壇を手指すと決めて、此処までくるのに特に何処かへ立ち寄つたことはない、最速でここまでたどり着いたはずである。

祭壇へ向かうこと話をしたのは精々騒がしいレストランのみであつた、それでも先回りしたということは町の中からすでに狙われており、そいつが黒の牙に依頼をしたといつことだらう。

「いきなりだが、死んでもらおつ」

大男が一言発すると同時に集団の男達も勇達を包囲する、動きを阻害するのだろう男達全員息を合わしたようにマントを外す。

「きやー！」

その瞬間マリアの口から小さく悲鳴が漏れ、勇達の表情も引きつり、離れていたため黒い牙の円陣から外れていた晶も血の気が引いていく。

マントの下に見たものは

毛が一本も無い頭。

褐色を通り越し真っ黒に日焼けした皮膚。

月の光を反射する汗にまみれて光る体。

力めばはちきれそうな暑苦しいまでに鍛え上げた筋肉。

そして

身に着けているのはたった一枚の際どいパンツ。

正におぞましいモノを見たのだ、そんな姿が露面の大男含め四方八方に立ち並んでいるのである、特殊な性癖を持つならまだしも正常な人には途轍もなくきついだろう。

「円陣を組め！ 絶つ対に後ろを取られるな！」

声を振り絞る勇の一聲に同調し全員途轍もない気合をみせる、それはそうだろう暑苦しくも汚らしい男たちに触りたく無い、まして動きを封じるために羽交い絞めなどという事態はなんとしても避けたい。

「気持ちわるいな、おい」

晶達の気持ちを代弁するよつに嫌な顔しながら勇が気持ちを口にする。

「俺達の何処が気持ちわるいか！？」

反論とともに黒い牙の一団は各自力んだ、何処で知つたのか自然としそうなるのか、筋肉の大会でみる体勢になる。

ムキッと露になる筋肉と浮き出る太い血管が熱さを増し、そして爽やかつもりか歯を見せる笑顔、しかし虫歯や歯抜けやら黄ばんでいて爽やかとはほど遠かった。

途端口元を押さえる勇達であったが特に酷かつたのは晶で記憶から即刻抹消しようとした氣を失いかけていた、なにせ勇達を囲む黒い牙の外にいるのだ、目に入ってきたのはパンツ食い込む尻である、眼に毒極まりない。

「なんだその態度は！」

勇達の態度が心外だつたのだろう、黒い牙の一団は怒り心頭に武器をかまえた。

### アイスアロー

無詠唱で撃ちだされる複数の氷の矢、射程ギリギリでメイが撃つたのだ、それを皮切りに砂を巻き上げ黒い牙が一斉に襲い掛かる。

ハルバート、クレセント・アックス、カットラス等、様々な接近戦武器を持ち牙を剥いた。

勇達はそれら全てを弾き、避け、円陣を崩さないよう、背後を取られぬよう立ち回り迎え撃つ、激しく打ち合い武器が激しくぶつかり火花を散らし、徐々に戦いは勇達が優勢になりつつあつた。

「くそ！ なんだこいつ等、思つたよりやりやがるー。」

大男が悪態をつく、接近戦一辺倒の黒い牙達は円陣を崩せずにいた、勇達の実力を見誤つていたのだろう、そして自分達が得意とする砂漠での戦闘といつこともあつたのか慢心していたのが晶も見ていて分かつた。

勇達は動きづらい砂地だつたが基本迎撃するだけに専念していたのだ、多少は足を取られていたらどうが迎撃するだけだつたので動きを最小限に抑えられていたと考えられる。

「いれなら大丈夫か 」

観戦していた晶に突如何かにぶつかる、衝動的に振り向くとそこには見知らぬ人が居た、砂と似たような黄色で厚手の布を頭からかぶり口元を布で覆つっていた、晶の存在が想定外だつたのか黒い瞳は驚きに見開いている。

お互い唐突な出来事だつたのかジッと見詰め合う、晶の頭に黒い牙にいる幽靈の話がよみがえり、事態を把握し行動を起こした。

すぐさま踵を返しその人物から離れようとするが相手の方が上手であった、後ろから乗つかられ全力で逃げ出そうと晶は暴れるが一向に抜け出せる様子は無く、腕を後ろに捻られ取り押さえられていた。

「何者だ」

無理やり立たされ、中性的な声と共にナイフを当たられた晶は尋問されるがどう答えるか頭を捻る、

「答える」

「ぐ、勇の……勇者達の仲間だ……」

早くしろということなのか刃を食い込ませてきたのだ、ろくに考  
える時間が無かつた晶は白状するほか無かつたが全くナイフが引つ  
込む様子がなく無言が続く、そしてそのまま晶を押しながら勇達へ  
と近づいていった。

「そこまでだ！」

ナイフの人物の声が響きわたると同時に全員動きを止める、月明  
かりのなか状況を把握した勇が激昂するがナイフの人物は意に介さ  
ない。

「撤退するぞ！」

「しかし御頭」「

「タウロー、つべこべ言わずに従え！」

タウロと呼ばれた大男は不満を口にするがナイフの人物は言葉を  
遮り命令を下す、タウロ居は小さく舌打ちをして渋々従い周囲へ命  
令を下した、それにあわせ周りの男達も撤退し始めるところから、ど  
うやらナイフの人物が頭のようであった。

「こいつを返して欲しかったら、オレ等のアジトに来い、場所は貴  
様らの目的地と同じ砂嵐の中だ」

言い放つと晶の腕を縛り上げ駱駝に乗せ、そのまま自身も乗り込み走り去っていく、それを悔しげに見るしかない勇達の姿に晶は申し訳なく、そして悔しく思うのだった。

「御頭、何で撤退したんですか？　そのまま人質で動けなくして、やつちまえばよかつたんじやないですかい？」

「この撤退が非常に不満なのだろう、タウロが慄然とした顔つきで晶達の隣によせる。

「ふん、あのままだとこっちがジリ貧で殺されていたぞ、なら一旦体勢を立て直して有利な場所で迎え撃つた方が確実だ、それにこいつが何するか分からぬからな」

タウロが何か言いたげだったがナイフの人物は睨みを聞かせて黙らせていた、そしてタウロの駱駝に近寄ると晶が邪魔だと言い放つ。タウロは嫌そうな顔をしつつも晶を引つつかみ力任せにうつ伏せのまま移し変える、ナイフの人物が嫌いなのはたまたこの場に居たくは無いのだろうか？　不機嫌な顔をしながら先行する一団を追いかけた。

「お前ずいぶん大人しいな、何か企んでいるのか？」

無言だったのが怪しく思つたのかタウロが訝しげに晶を睨む、ほんどうされるがままの晶がさぞかしおかしいのだろう。

「企んでいる？ ふふふ、運動能力も低い自分が暴れたところで、ボコボコにされるのが目に見えています、大人しくしたがつていた方が痛い思いはしない」

答えつつも晶は逃げる腹積もりである、縛られながらもどこかに隙は無いか付け入る場所は無いかと大人しくしつつも機会を窺つていた。

晶は勇達をおびき寄せる餌でしかなく、このままアジトへ連れて行けば殺される可能性が高かつた、死体でも勇達に生きていると思わせればいいのだ、そのうえ色々面倒を見る手間も省ける。

ただ道すがら殺される可能性も大いにあり、刺激しないようにするため丁寧な口調もその一つである。

「まつたく、邪魔なら連れて来るな、先代の子供で継いだからって偉そうにするんじゃねえよ、畜生が」

タウロはあの人物が頭になつてている事にかなり不満を持っているようでブチブチと悪態をつく、そのときにはすでに先行する一団にたどり着いていた。

タウロの愚痴を聞いた部下もどうやら同じ思いらしく各自不満を言い合つ、もちろん後方に居るだらうナイフの人物には聽こえないように声を小さくしている。

その現状を見た晶に天啓がひらめいた、黒い牙内では大分不満が溜まつているようで、とくにナイフの人物が頭にいることが特に不服らしい。

その辺りを突いて部下達が反乱を起こせばその混乱に乗じて逃げられるかもしね、勿論上手くいかは分からなかつたが今現状で晶が出来ることはこれぐらいしかないと確信していた。

「あの、少しいいですか？」

「だまれ、殺すぞ」

タウロは視線も向けず面倒くさげだつたが晶は今しか機会がないと言葉を続けた。

「それだけ不満でしたら、貴方が率いて力ずくで地位を奪つたらどうです？」

「……何だと？」

タウロが視線を向ける、言葉としては疑心に塗れていたが瞳の奥にはどこか期待を持っているようであつた、晶は内心ほくそえみながら煽る。

「だから、反乱起こしたらどうか？　と言つてゐるのです、それに皆さんあの人人が頭なのが不満なのですよね？　だったら皆さんで襲えば流石に勝てるのでは？」

晶はうつ伏せ状態のため首を上げ、そのまま視線を周囲の部下達にこのまでいいのかと投げかける、やはり鬱憤がたまつていたのか、はたまた切欠が無かつたのか序所に同意する声が上がつていき広まつていく、そして晶は最後の決め手を言い放つ。

「それにタウロさんが頭になれば万事上手くいきますよ」

「……ククク、確かにそうだな、先代からの義理で従つていたが継いで頭になつただけの奴について行く意味は無い、これだけの人数で襲えば……」

己が頭に着いたときのこと想像しているのだろう、タウロが声を押し殺して笑うのを見た晶は掛かつたと確信する、後は反乱という状況の中で自分に意識がそれた瞬間に逃げるだけである。

タウロが速度を落としていく、部下達も同じく速度を落としタウロの命令を待つていた、その顔は獰猛な笑いが浮かんでるいるのだった。

「てめえ逃げるなよ」

タウロは邪魔とばかりに晶を砂地へ落とし釘を刺す、それを聞いた晶は思わず口角が上がるが顔を伏せて隠す、千載一遇の好機を逃すつもりは無かつた。

「何かあつたのか?」

追いついたナイフの人物が何の疑いも無くタウロへ近づいていた、笑いをなんとか堪えた晶は顔を上げると、先ほどはまではマントでみえなかつたが今は頭と口元を出していた。

晶は改めてナイフの人物を見た、年齢は二十ぐらいだろう若々しく鋭い黒い瞳は眼力がすこかつた、黒い髪は短く耳辺りで切つているが癖が強いのか外に跳ねている、黄色いマントの中は袖は無く、腹部を出したシャツに足の付け根までしかない短パンと軽装である、晒される腕と足は細く色は褐色であつた。

「ああ、あつたさ」

嘲るタウロの物言いに何か感づいたのだろう、ナイフの人物は見据えながら何時でも動けるように身構えていた。

「これから俺が黒い牙を率いていく、頭は、いや、ジャース、お前はお役御免ということだ」

ナイフの人物の視線を完全に無視して、タウロは腰に挿している

カットラスを抜き、切つ先を向ける。

「お前一人でオレに敵うとでも？」

ジャースと呼ばれたナイフの人物は腕に自信があるのだろう鼻で笑い蔑む、軽やかに飛び降り手にはいつの間にか手には木目のような波打つ模様が浮かび上がる短剣をもつっていた。

これはダマスカスナイフと呼ばれ、特殊な製造工程を経て模様が浮き出た鋼材を使用した強固なナイフである。

「俺一人だけじゃないさ」

タウロが虚偽にした口調と共に片手を上げる、その合図と同時に次々と周りの部下達も駱駝から降り得物を構えた。

多勢に無勢といつ状況だからだろう部下も下卑た笑みを浮かべている。

「素直に頭領の証を俺に渡せ、痛い思いはせんぞ」

「だれが渡すか！」

胸元を隠すように片手で押さえジャースは反発する、しかしその反応はまずかった。

危機が迫り大事な物を取られる、そのような条件下だと無意識に取られたくない物へ手を伸ばしたり、又は視線を送る等してしまうのである、タウロは理解したのだろう、笑みを深くすると片手を下ろし明らかに軽視した命令を追加していた。

「あつさり死んでもつまらないからな、ほじほじこじておけ」

一斉に襲い掛かる部下達と同時に晶は巻き込まれないように全力で離脱した、一瞬タウロと晶が合づが情けない晶の姿をみて楽に捕まえられると思つてゐるのだろう、完全無視であつた。

少し離れたあと出来るだけ視界に入らないよう身体を伏せて息を殺す、乱雑に縛つてあつたため解け安く両手が自由になつていて、そして状況を把握しやすくなるため振り返る。

そこではジャースは素早い身のこなしで軽々避けていた。

「なんだ？ 見にくい？」

晶は目を擦り集中するが黒と黄色の衣装にみるものなのか、周囲に溶け込むように分かりにくくなつていた。

かすり傷付いている様子は無かつたが、驚異的な回避を行うジャースもやはり人間であつた、避ける事に手一杯なのだろう、証拠になかなか攻撃に移ることも無く盜賊団も無傷である、四方八方から襲われるのだから仕方が無いだろう。

「んん？？ どうしたんだ？」

「はあ！ はあ！ つるさい！」

愉快に笑うタウロに対してもジャースは徐々に体力がなくなつて来たのか時間と共に動きに纖細さが無くなつてきていた。

同時に所々小さな切り傷が付き始め、それでも暫く避けていたがついに足を砂に取られ転倒し、ジャースは素早く立ち上がったがその息は酷く荒い。

「もうお仕舞いか？」

高みの見物を決め込んでいるタウロが楽しそうに問いつて、周囲の部下達もまだまだ余裕があるのかニヤニヤと笑っている。

「さて、証を渡してもらおう」

駱駝から降りたタウロが近づく、ジャースはフラフラになりながらもダマスカスナイフを振り翳した、最後の力を振り絞ったのかそれなりに勢いはあった、しかしあくまでそれなりである。

「そんなものが当たるか」

タウロが軽く避けるもやはり体力の限界かジャースそのまま体勢を崩し、そこを止めとばかりにタウロが胴を殴りつけた。

ついにぐつたりしたジャースだったが、意地でも取られまいと無理やり身体を動かしうつ伏せになつた。

「無駄な悪あがきしてんじゃねえよ！」

タウロが力ずくで仰向けに転がされ、その時首元から黒一色の牙が付いたネックレスが飛び出しタウロは強引に引きちぎつた。

「こままで！苦労さん、せいぜい生き延びることだな、こんな砂漠のど真ん中じや無理だらうがな」

高笑いしながらタウロが撤収の合図をする、それとともに部下達も駱駝に乗り去つていくのだった。

そのときにジャースが使つていた駱駝や水なども持つていってしまつのだ、砂漠で水無しは死刑宣告された事も同然である。

「ふう、行つたか……」

その様子を見ていた晶は一息ついた、田論んでいた通りに逃げ出すことに成功したからだ、持ち前の影の薄さ、そしてとタウロが頭領になつたことにより浮かれたのだろう、頭の中から晶のことが消えていたようだつた、証拠にタウロ達は遠くで砂煙を上げていた。

「さて戻ろうか……あ……」

立ち上がつた晶は田の前に広がる一面の砂漠に、あることが脳裏によぎる、はたして戻れるのかということであった。

円を背に歩けば戻れるのかと思えばかなり怪しく、祭壇へいくのはかけられた魔術かなにかでいいけるだろう、しかし戻りに同じような効果があるようには思えず、なおかつ砂嵐の中にある祭壇へ進むとした場合一人で危険な砂漠を歩けるのかという疑問もあつた。

「やばい……早計だつたか?」

晶の額に汗が垂れる、黒い牙から逃げられたのは良いが砂漠はド素人、当然当てずっぽうに歩いても無意味である、さらに魔物に襲われた時手立てが無いのは非常に危険だった。

晶は危機的状況が変わりないことに茫然自失になっていたが、その時咳き込む声が聞こえ晶は首を回すと視線の先にはジャースが息を荒げながら仰向けに倒れている姿があった。

「そりいえば居たな……ん？ 待てよ」

晶に天啓が舞い降りる、砂漠を拠点としていた黒い牙の元頭である、砂漠を知り尽くしているだろう、ならば砂漠を案内してもらえば無事たどり着くのではないか？

交渉材料もとりあえずあり、殺される可能性がある危険な賭けだつたが選択は一つしかなかつた。

「あの、すこし良いですか？」

息が整つたことを見計らつて晶が声を掛けるとジャースは鋭い視線を向ける。

「なんだ？」

明らかに敵意をきかせるジャースであつたが晶は毅然とした態度で交渉する。

「今から自分は砂嵐の祭壇に行かなければいけません、道案内をしていただけませんか？」

ジャースに砂漠の歩き方と護衛も兼ねてもらえればあとは戻るか進むかである、戻るよりも連れ去られたと思われている祭壇に向かい、勇達と合流したほうが良いと晶が判断した結果である。

「なんでオレがお前のために案内しないと行けないんだ？」

突き放す物言いだつたが晶にはあることから従つと確信があつた。

「もちろんただとは言いませんよ」

晶は懐から水の入つた袋ともう一つ空の袋を取り出し半分に分ける。

「半分貴方に渡します、どうしますか？」

「どうしますか？　くく、お前を殺して奪つてしまえばいいよな？」

ジャースが凄むがその瞬間晶は片方の水袋を地面に落とした。

「なー？　てめえ馬鹿か！　何てことしやがるー！」

完全に無視しながら晶は落とした袋を拾い上げ再度一つに分ける。

「再度問います、案内するか？　それとも一人で朽ちるか？」

ジャースは手持ちの物をすべてタウロに持つていかれたため、生命線である水を交換条件に出されたなら従つしか道は無いだらつ。

「チツ分かつたよ」

相手の思つよつになるのが気に食わないのか、悔しげな顔つきをしながらジャースは渋々案内をすることとなつた。

「道中お互に助け合いましょつ、えーと?」

「これから一人きりである、敵意むき出しのジャースに何時までも睨まれ続けるのは勘弁と晶は手を差し出す。

「……ジャース……」

「自分はハ頭晶です、よろしくお願ひします」

握手を求める晶だつたが悪態をつくだけで応じことなく、ジャースは歩き出すのであつた。

月が輝く夜の砂漠を黙々と一人で歩く、あれから一日ほど立つていたが時々砂漠でのタブーや必要なことを実地で教えるぐらうにしか話をしなかつた。

晶は何か話そつかと思案していた、無言で歩いていると広い砂漠でもやはり空気が重く感じるのだ。

少しでも重い空気を何とかしたい晶は雑談でもすれば幾分楽になるのかと共通の話題を探す、しかし知り合つて間もない上に敵対関係だったのだ、何も浮かばず晶は口を開いたり閉じたりするだけに終わつてしまつ。

「おい、お前何者だ？」

「え？ オレ？」

考え事をしていて不意打ちで話しかけられ形になり晶はビクリと体を震わせる、無言で歩いていたところに突然話しかけられたのだ驚くのも無理は無い。

「お前しか居ないだろ」

振り向きながら問い合わせるジャースの目は疑問に溢れていた、それでもやはり鋭く物怖じしてしまつ晶であった。

「えっと、オ、自分は

「普通に話して構わねえよ

ジャースに言われるが晶は躊躇してしまつ、水を渡したがジャースが本気になればいつでも晶は殺せるのだ、普段の口調に戻すかですます口調を続けるか迷う。

無言が続き時間が経過するにつれてジャースの視線が鋭くなつていく、相手の機嫌を損ねるのは得策ではないと晶は腹をくくり話し出す。

「オレは極普通の一般人だけど？」

晶の答えに大いに不満なのだろう、睨み殺されると勘違いするほどの眼力でジャースは睨みつけた。

「そんなわけ無いだろ？　お前達を襲つた時まつたく気が付かなかつたぞ！　一体なにしたんだ？」

ほとんど癖でやつているため晶自身は特に意識してやつていないので、そう伝えると呆れ顔になるジャースであった。

「その才能もつとつまく生きさせば暗殺、盗みなんて楽勝だらつに……」

「……」

ジャースはもつたいないとばかりに首を振る。

「仲間にも言われたよ、でも殺氣や戦闘中とか周囲に意識集中している状態で近づくと感づかれる」

だから無理だと晶は肩をすくめるだけであった。

「なるほど……」

「ジャースさん？」

思案顔のジャースの顔を覗き込む晶に不吉な予感がよぎつた。

「よし、お前に暗殺の方法教えてやるー！」

「はあー？」

突如ジャースは顔を上げ晶の肩に手を置くが突然教えてやるといわれても困る晶であった、教えたぐらいで簡単に暗殺できれば苦労はないのである。

「というか、お前も戦闘に参加しろよー。オレばっかり魔物退治しているじゃねえか！」

道中魔物に襲われた時、相変わらず風景に溶け込んだように無視される晶である、当然残ったジャースに魔物が殺到するのだ。

しかしジャースは強かつた、得意とした戦法は暗殺術でありその技術は凄まじかつた、魔物の直ぐそばに立っているにもかかわらず、魔物が見失うほどである、そして急所を的確に突き死に至らしめるのである。

「待ってくれ！ そんな事いきなり言われても簡単に出来るものでもないだろ！？ しかも荷物を背負っているんだ！ 多分じつをしているから気づかれないだけで動けばきづかれやすくなる、絶対無理だ！」

「無理つて言うなー！」

ジャースの手の平が唸る、引っ叩かれた晶は吹き飛び地面に座り込んだ、その体勢が横座りになり、片手で身体を支えて打たれた頬を押さえている姿はスポーツ漫画のヒロインである。

「なにするのよー！」

自分の姿勢を瞬時に理解した晶は思わず女言葉になっていた、しかし細い体つきとはいえ男である、ただ単に気持ちが悪いだけだった。

「やめる、気持ち悪い」

「すいませんでした」

晶はすぐさま体勢を正座に戻し即座に謝る、ジャースの一聲はとても威圧感があり、晶を見る眼は汚物を見るように冷え切っていた。

「とにかく、まだ祭壇まではまだまだ掛かる、その間出来るだけ教える、覚えろ！ いいな！」

「了解…」

ジャースの気合の籠つた声に流されるまま晶は姿勢を正す、返事の後スバルタになりそうだと後悔するが後の祭りであつた。

「だけど暗殺の技術なんてそんな簡単に教えていいものなのか？」

人に見つらないように闇に時には人ごみや自然物に紛れて殺していく技術である。

やり方が分かると対策も取られやすくなり、故に門外不出とまではないにしろそう易々と教えることは無いだろう、

「別に構わないさ、覚えたとしてもオレを殺すなんて十年早い」

どうにも腑に落ちない晶はしつこく問いただす、けんもほろりにされるばかりであったが晶は諦めなかつた、というよりもだんだん楽しくなってきた。

「今まで冷たい反応でしかなかつたが、先ほど教えるといつた時はどういか子供を相手にしているかのようだつた。

問い合わせているときも雰囲気も少し柔らかくなつた気がするのである、しかし余りにしつこかつたのか次の瞬間には首に刃物を当てられ黙ることになるのだった。

砂漠とはいっても一人だけしか居ない状況というのは自然と手を取り合つものである、やはり人間とは群れるものだからだらつ。

晶が持つていた食料　乾燥した肉などの携帯食品　を一人で分けて食べたりしているとジャースに對して仲間意識を感じ始めている晶であった。

ジャースも大人しくしている晶に警戒心が薄くなつてきていたのだろう、二人の歩く距離は初めよりも近くなつてきており、ジャースの態度も幾分柔らかくなつてきていた。

その頃には晶は自分の一言で黒の牙を追い出された罪悪感と、気に掛けてくれる嬉しさとであることを話さうと決意する。

「ジャースさん」

「ん?」

「見てほしいがあるがものがある」

晶が何処かへ手招きした後地面を指刺す、すると虚空から水が落

ち始めた、晶は水色の少女を呼び、水を出してもらったのである。

ちなみに最初の交渉時水袋を半分落としたのもこれが出来るため、一人で砂漠を歩く時には水に困らなかつたためだ。

「なー? 今何をした!?」

突如空中から水を出したのである、しかも水が存在していないもちろん水蒸気は極僅かにあるだろ?が 砂漠で出したのだ、驚くのは無理もない。

「今から話すことば全て本当のことだ、軽蔑しないでくれるか?」

魔力は感じる」とも見ることは無理だが、そこかしこに居る少女が見えること、当然魔術が使えないが、少女に頼めば小さなことが何か出す」とが出来る」と等、自分が見えたもの出来ることを全て話した。

「眞の口差しは強かつたからな、どこかで休んでから行こう」

ジャースがやたらと心配しだした、どうやら眞にやられて幻覚でも見ていると判断されたらしい。

「大丈夫だつて! 今話したことは本当だ!」

晶は眞剣にじつとジャースと眼を合わせる。

「……」

「……」

「…………」

「…………」

「やうか其処まで少女に

「

「食えてもいなーしー 少女好きではないー！」

勇達と同じ」と反応をすると晶は予測していた、哀れむような表情をするジャースの言葉を遮つて晶はつっこむ、田の前に卓袱台があれば思い切り引つ繰り返していただろ。

「やう思われたくないから、こままで黙つてたんだよ

「やうかそーか、一応正常だと信じてやる」

「一応とか言つてこるあたりすでに少女好きと思われているよな

「…………」

頷きながら肩を叩くジャースの対応にガックリしたんだれる晶で

あつた。

「腹へつた…………」

「晶つたな、余計腹が減る

晶は腹を擦りながら力ない声を出していた、聞こえたジャースは苛立ちを覚えているようだつた。

実はタウロに存在を忘れ去られた晶の荷物に手をつけられなかつた、一通りの物はそろつていたのだが所持していたのは晶一人分である、水は晶のおかげで確保できたが流石に食料は無理であつた。

「祭壇まではあとどれ位で着く？」

「そうだな、歩きだからあと一〇〇べりいか？」

月明かりを頼りにジャースが指を折り曲げ数えている。

「きついな」

体力持つのかと不安になつた晶は月光に照らされたジャースの姿を見る、肌が見える部分から鍛えられているようであつた、しかし晶と同じように全体に細くタウロ達のように筋肉達磨ではない、それなのに晶よりも大分余裕があるようだつた。

筋肉がある分代謝が良く持久力が無いものである、ジャースの身体はどうなつているのかと思う晶は話の種とばかりに疑問をぶつけた。

「ジャースさんは細いのによく体力がよく持つな？」

「食い物が少ない砂漠で住んでいれば自然とそうなるな」

晶の質問にジャースは呆氣羅漢に言い返していた、晶はそんなも

んなのかと納得しながらも人体の不思議とじつくりジャースを観察していた。

突然晶の身体に軽い衝撃と倒れる感覚が襲い晶は咄嗟に目を閉じた。

「おい！ なにボーッとしてんだ？」

ジャースの怒氣が籠つた声に晶が目を開ける、そこには眉を吊り上げ睨むジャースの顔があつた。

実はジャースが何かを見つけ止まり振り返つて停止を促したがし晶はそれに気がつかずぶつかり押し倒したのだ、体勢を把握出来ていない晶は謝りながら上体を起こすがその瞬間ジャースの眼光が鋭くなつた。

「てめえ」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

素早く離れた晶は地面にすりつけるように土下座する、晶が身体を起こしたときに地面に手を置いたつもりが焦つていたため押されたのがジャースであつた。

押し倒され混乱していたとはいえ起き上がるときに押さえつけられたのだ、ジャースが怒りを露にするのも無理は無いと理解した晶はひたすら謝るのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6397w/>

---

脇役

2011年10月20日22時01分発行